

339

169

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始





外451

別



機堂學人著

# 北海道之開發

文武堂發行



友人藤井君北海の開拓に留意すると多年研鑽頗る努めしあり予往年君等と北海道を歴遊し足跡略ぼ全道に遍く到る所天與の富源を以て填充せらるゝを見喟然として歎じて曰く北海道は眞に日本の寶庫なる哉と所謂十五ヶ年計劃なるものは即ち此の富源開發に資すると大なれども時勢の進歩に伴ふて其の計劃も亦自ら伸縮せざるを得ず、予北海道に遊ぶの後臺灣に赴き新領土の經營及び風物を視察する所ありしが其の利源の巨大にして富資の未だ十分開發せられざるものあるを見て亦北海道に對すると同一の歎聲を發せざるを得ざりし、今や帝國の領土は年を追ふて發展し朝鮮、樺太に加ふるに滿洲の施設あり國運の發達駁々として測るべからざる

大正  
2. 2. 7

内文



ものあらむとす、然も其の經營施設に關しては財政及び其他の關係上未だ能く人事を盡さざるものあり、經世に志あるもの此の點に就いて大に研究する所無かるべからず、予は君が其の視察の効果を空くせず之を發表して以て社會に示すの親切と熱心を感謝せざるを得ず、君若し閑あらば他日更に他新領土等を視察し以て社會に貢獻せられんとを至囑々々

### 中島 氣山

### 一言す

世運幾度か推移すと雖北海の經營は未だ確且つ堅なる基礎を有せず往年河嶋長官十五ヶ年計畫を立てしも今や其人不在らず。獨り有爲の長官河嶋翁の逝けるのみならず十五ヶ年計畫の根本義も事業の立案明にして財政の打算今に不如意のもの存するが如し。

北海の自然收入に差誤あらば之を更に打算改訂すべし事業の更に伸縮すべきあらば速に之を伸縮すべし要は北海開發の大なる遲滯は獨り北海のみと云はずして帝國の爲に深憂とす特に北日本の二帯は之の憂を分ち抱くや切なるあり。



網走線は成り長蛇の如く軌道は見へ小樽港灣は改築効あり船舶の  
吞吐を盛むならしむ、されど北海の海陸は抱擁する處大なれば一  
港一線の如何を以て毫も心を許すべからず。  
吾人今日數年前の所見を記すも之れに依りて尙前途劃策の資に幾  
分か供せられんとを禱る次第也。

大正二年一月中旬東都の雪裡にて

機堂學人識

目

次

第一篇 北海道之開發

○ ●北門經營の基礎……………	一
●河島長官の施設……………	七
●刻下の一大急務……………	一〇
●國防上に連繫す……………	一四
○ ●北海の鐵道概觀……………	一七
●道民の鐵道意見……………	二一
○ ●北海道鐵道速成如何……………	二五
○ ●室蘭港を速成せよ……………	二八



● 港灣の修築状態	三二
● 拓殖資金の充實	三七
● 結論	四二

## 第二篇 北海道の視察

● 北海唯一の船渠	四八
● 五稜廓畔の感慨	四九
● 函館の大懇親會	五一
● 岩内と漁場	五四
● 河島長官の經營談	五六
● 北海宏原の兩工場	五九
● 石狩河を下る	六一

● 一部の斷腸史	六三
● 十勝中原の帶廣町	六五
● 沿道を觀て釧路へ	六八
● 釧路築港を觀る	七〇
● 網走線の現在と將來	七二
● 物資富饒の土地	七四
● 旭川の商取引	七七
● 北海道の水力利用	七九
● 品川子爵の遺徳	八〇
● 新築の王子製紙工場	八二
● 支笏湖水の大利用	八四
● 北見沿岸の諸邑	八七



●安全燈にて坑に入る	九〇
●壯容なる室蘭	九三
●更に長官を訪ふ	九四
●札幌に解團す	九九
●罹災後の青森市	一〇二

四

### 第三篇 日本製鋼所を観る

●はしがき	一〇四
●會社成立の由來	一〇五
●經營方針と事業	一〇七
●大工場を観覽す	一〇九
●同所の三大施設	一一三

●製作品の概要	一一四
●會社重役の談	一一七

### 第四篇 秋の北海道

●湖水のさま／＼	一二〇
●元氣に滿た農科大學生	一二三
●愛奴の熊祭り	一二六
●中の島の秋色	一二九
●驛遞と馬	一三一



## 北海道之開發

機堂學人著

### (一) 北門經營の基礎

四十三年春地方官會議の節河島長官は新に成立せる十五ヶ年計劃を基礎とし一場の演説を試みたり其中に次の一節ありき……此等重要の事項は本道經營上の憲法とも云ふべく之に依りて今後道内の國庫收入を以て拓殖上缺くべからざる諸般の經營を爲すことを得べき也該計劃は爾後國家的變動の起らざる限り決して變更せられざる豫定にして本道の經營は於此が初めて確乎不拔の基礎を得道民は勿論新に移住するものは自ら意を安んじて業に従ふことを得るに至れり云々……該計劃は實に同道の頼の綱にして復活せる北海道を生じたるも全く此爲め也。即ち最新の北海道に就て其現在及將來を



二  
説かざるには更に該計畫を一瞥するの要あり。

其十五ヶ年計畫は先づ行政費、森林費、拓殖費に區別し、(一)行政費 豫め年度割計劃を定めず各年度に於て法令又は實際の必要に應じ相當の經費を要求すること(二)森林費 森林の整理及經營に關する既定の計畫を遂行すること (三)拓殖費 將來約十五ヶ年以内に於て拓殖上必ず施行することを要すと認むる事業及其所要費額を豫定し確實に之が遂行を期することとし大體に於て左の方針に出づ

(一)拓殖費に關する本計畫の繼續期間を約十五ヶ年とし其の經費總額約七千萬圓を國庫より支出す(二)從來の地方費補給を廢止して地方費所屬事業中拓殖上國費を以て施行することを要すと認むる事業は明治四十三年度以降拓殖費の支辨に移し事業の統一を圖り國費及地方費の分界を明にすること(三)森林及未開地より生ずる収入の如き特別の収入を以て拓殖事業に對する直接財源と爲すの方針を改め拓殖事業に要する一切の經費は總て政府の一般歳入中より之を支辨す(四)政府は北海道拓殖費

に充つるが爲め明治四十三年度以降毎年(イ)確定支出額として二百五十萬圓及北海道に於ける政府の歳入増加額を支出すること但一ヶ年度の支出額は大體五百萬圓を超過せざること(五)拓殖費は特別會計と爲さざるも(イ)事業の種類に依り之を繼續費と爲し(ロ)繼續費に屬する事業完成後の不用額は他の拓殖事業に使用することを得せしめ(ハ)繼續費以外の各年度支拂殘金は會計法第二十一條に規定する豫算明許の方法に依り本計畫の終り迄追次に繰越使用せしむること(六)拓殖費に對する國庫支出額に關する豫定は國家事變に際し一時多額の支出を要する場合の外之を變更せざること。

以上の方針にて編成し拓殖費は之を大別して(一)殖民費(二)産業費(三)道路橋梁費(四)土地改良費(五)河川費(六)港灣費の六項と爲す、費額及所屬事業の概要左の如し

## (一) 殖民費



總額約六百四十二萬圓にて直接拓地殖民に關する諸般の經營を行ふが爲要する費用にして(一)北海道地形圖の補足調査等(二)殖民地の選定及區劃(三)未開地及官有地の處分(四)北海道廳の管理に屬する土地の整理及堤塘敷地の調査(五)移民の保護獎勵等の事業に充るものとす本費に屬する事業は概ね既定の計劃を遂行するものなりと雖地形圖の補足、土地の整理及堤塘敷地の調査は本計劃に於て新に開始し若くは擴張せしもの。

### (二) 産業費

總額約二百八十二萬圓這は産業の發達を圖り特定の事業を經營する爲めに要する費用にして(イ)水産試験(ロ)漁場測量(ハ)農事試験(ニ)各種産業の獎勵に充つるもの本費に屬する事業中水産及農事に關する試験の一部は地方費より移換したるものにして其他は概ね從來より國費に屬し實質上何れも在來の事業を繼續施行するものなりと雖水産試験に於ては新に鍊に關する組織的の調査事業を開始せんとす。

### (三) 道路橋梁費

總額約二千五百四十六萬圓本費は陸上交通機關の設備に要する費用にして専ら(イ)道路の開鑿橋梁の新設(ロ)道路橋梁の改良修繕(ハ)驛遞渡船の新設維持等の事業に充つるものとす本費に屬する事業中道路の改良は純然たる新事業にして其他は從來の事業を繼續するもの也と雖其費額は著く増加す。

### (四) 土地改良費

總額二百四十二萬圓本費は農牧に適する大地積の濕地及泥炭地を改良し水田の開発を助長するが爲要する費用にして(イ)専ら幹線排水等の堀鑿(ロ)私人の經營に屬する土地改良事業の獎勵に充るものとす從來は單に土功組合の灌漑事業に對して少許の補助を爲せしに止りしもの。

### (五) 河川費

總額約千廿八萬圓本費は河川の整理及治水に關する諸般の調査及經營を爲すが爲め



に要する費用にて(イ)河川の調査(ロ)河川の監視取締(ハ)河川の浚渫(ニ)治水工事(ホ)堤塘敷地處分等の事業に充つるものとす本費に屬する事業中河川の調査及浚渫は從來の事業を擴張したるものにして其他は新事業也就中治水工事中石狩川治水工事は四十三年より同川の下流十里餘に對して組織的の治水工事を施行せんとするもの其額約六百五十萬圓を要す。

### (六) 港灣費

總額約二千二百六十萬圓港灣の調査修築を爲すが爲に要する費用にして専ら(イ)港灣の調査(ロ)小樽、釧路、留萌、函館、室蘭、網走、稚内、根室の八港修築の事業に充つるものとす本費に屬する事業中小樽及釧路の築港は從來より繼續施行中にして、留萌、函館築港は四十三年度より開始し其他は以上各港修築工事の完成に伴ひ順次に施行するものとす。

經營上の大綱は右の如し。如何に之を善用して北海の大發展を來すべきかは長官の一  
大責任也或る説を爲すもの曰く明治四年の北海道は農産、林産、水産、鑛産、工業を  
綜へ金額卅七萬四千七百九十九圓なりしもの四十一年に於て六千八百八十八萬九千二百四  
十三圓を見る約六十倍の進歩也誰か隔世の觀なからんと一應の樂觀はさることながら  
北海の拓殖は遼遠なり道民なるもの奮ふて道政を補け且つ之を戒めて拓殖の大成を期  
すべき也。

### (二) 河島長官の施設

▲拓殖史 政府は北海道に對し三十四年に於て十年計畫を定め國費及地方費を分離  
し國費に於ては行政費總額約千二百萬圓拓殖費約二千六百六十萬圓とし拓殖費は殖民關  
係の諸件及小樽、釧路港の修築又は航海補助等に使用を期せしも實行半にして日露戰  
役に遭ひ事業の中止若は豫算の繰延に至り工程頗る遲滯す。尙三十九年に十年計畫以  
外一種の案を立て森林の經營を創始し未開地の立木を賣却し收益を以て明治四十年度



以降十六年間に釧路、留萌、小樽、函館、網走、根室の六港を修築するの計畫を爲せしも議會協賛を與へず四十年更に森林の整理、未開地處分法の改正此等の收入を以て築港其の他拓殖上の新事業に資することに決定せしも規模小にして畢竟十年計畫に對する一種の補足にて北海の大發展に目鼻の附きたるものに非ず遂に北海道の拓殖は近き過去に於て不成功を紀念するのみなりき今や茲に十五ヶ年計畫定る、北海道が求むる處の最先は何物なるかを考ふるに劈頭第一は

▲移民の招致 也、予は今回北海道を跋渉して勞力、資本、土地關係即ち三足鼎的の問題に接し端しなくも經濟學を實地に復習するの感ありたり、北海道は千島等の屬島を除くも面積五千七十二方里海岸總延長千三百五十餘里四國九州を併せたるよりも大にして現在人口は大約百五十萬人、開墾地は豫定地積の三分の一とす之を人口稀薄なる岩手縣に比するも尙四百萬人を收容し得べき譯也。扱將來四百萬人は愚か之れが四分の一なる一百萬人の移民も北海道は如何して招致すべきか中々に問題ものな

り、由來北海道の如き積雪地とは云ひ乍ら之を海外の殖民地とせば四十ヶ年間に僅々百五十萬人の移民を見て止むが如き不態のことは演ぜざるべし這般の不成績は帝國大發展の爲に反動的犠牲に供せられしに因るべきは前般の北海道計畫が數々蹉跌せしに見て明なるも更に近く河島長官が土地處分法等に急激なる處置を施し而も其主意の存する處を廣く世に説明せず爲に一方事實的北海の拓殖に一頓挫を來し一方世人をして北海道に移住するも最早詮なしと誤解せしむるに至らしめし結果とす。長官は此の誤解の來りし處は棚に上げ移民減少の傾向を左の如く説明す(一)近年内地は一般に豐作なりしも本道は却て連年不作なりし爲自然之が減少を來せり(二)四十年以來經濟界不況に陥り移住者は渡道の資を得るに苦みたり(三)本道に工事又は作業等多からざりしに因る』と之れ一面慥かなる觀察たるべしと雖蓋し夫れ有るが爲めに長官施政の缺點は減殺すべきに非ずと確認す。乍併長官も急激の政策を以て一時過分の劇薬を投ぜしを顧み更に滋養分を與ふるの意味を考へてか又は移民の事實的減少を見卒然として驚



きしが將た十五ヶ年計畫の根底に要ありとしてか兎にも本年に入りては大に殖民經營に調和的態度と説明の要とを悟りしが如く今や河島一流の獨逸的議論を控へ眞に拓殖に勤むる意義を明かにして表面の嚴正と相待ち裏面頗る稍々調和の餘地を存し實際を重んずるに至り依つて以つて十五ヶ年計畫を活ける計劃として漸々成功の緒に就かんとす、而して長官が移民招致の主意及方法は凡次ぎの如し。

### (三) 刻下の一大急務

長官は四十一年法律第五十七號の未開地處分法は今後十ヶ年は如何にするも之れを確保履行して彼の土地ゴロなるもの、集滅を圖る決心なりと而も自作農等の移民に關しては能ふ限り保護を加ふる方針にて現在施設の外に(一)移民の課税低減(二)鐵道乗車の無賃(三)十五ヶ年計畫の工事賃金を潤はし以て拓殖資金に供する等夫々考案中のこととなるが斯て移民の増加を來すや否やは疑問也何となれば帝國は昔時開拓地として

北海道を有せしのみなるも今は豊饒の臺灣あり新領土の朝鮮あり而も本土の生産工業は著しく發達して勞力を呼ぶこと尠少ならず説く者北海道移民は朝鮮の移民等と異なり其假小屋を作るにも木材の缺乏なく飲料水困難などは絶無なりと。されど往時の北海道とは異なり漁業、農業等に一足飛の利得と且發展を爲すこと至難なるは事實にして移民増加も難物とす。

▲大水害は好機會 然るに晩夏關東北に大水害あり其の損害は死者實に一千二百餘名にて全潰流失の家屋六千七百餘戸浸水面積は四十四萬六千八百九十七町歩に及ぶ、時や將に禾穀種として畝圃に實るの際米作の損害桑園の打撃等未曾有の被害なるべく堤防の修築河川の改修等は國家直接に之が後圖を策すべきも亦も流離の一家乃至各自の私經濟に至りては善後を如何にすべきか實地を踏査せずと雖其の悲慘の極みは推測に難からず。茲に北海道は十五ヶ年計畫を立て港灣の修築を盛むにし土地河川の改良に著手し網走、留萌の二大鐵路は近く双方の海岸に臨まんとす殊に北海の官民は



移民を求むること旱天に雨を禱るに似たり、好機々々被害者は團躰又は各自に北海に移住を企つべし記者は曩に新十津川村蹟を報じて數年前の大洪水に際し大和邑民の移住せし成績を示せり、道廳に於ては『十戸以上團結して一ヶ年以内に移住せんとする者には他の出願者に先ち殖民區豫定地又は特定地に於て豫定存置を受けしむるの特典あり』特に大和移民の如く當該縣廳にて移民の指揮統轄を行ふに於ては道廳は大に歡迎して特に便宜を附與すと。要するに之の際道廳たるものは監督官廳と協力して臨機の處斷を行ふを要す彼の重箱揚子主義は時弊を匡正する點に穴勝不必要とせざるも國家の一大災厄に際會し之を收容すべき土地を有する北海道は之の際大に手腕を發揮すべきは勿論とす國家自働的とやらの講釋などすべき時機に非ず、扱移民の個所は如何

概容は最近道廳にて調査せし左記四十二年末の資材にて知るを得ん。

石狩	國	總面積	選定未開	耕地	既處分	殘	計
	町	町	町	町	町	町	町
		一四五、九五六、五	四八、九四三、八	三五、三七〇、五	三六、五六六、八	三〇、八七〇、二	

# 欠



# 欠

休みて明年春より作業に着手するを可とす。郷黨の有志は後援を要せむ。茲に參考の爲め最近特別處分に屬せし山梨縣罹災移住民の方法を記せむに明治四十年山梨縣に大水害あり罹災民六百四十戸北海移住を企て國庫より八萬圓縣より七萬圓合計十五萬圓を支出し四十一年に參百一戸四十二年に一百六戸を移し膽振虻田郡の内四ヶ所に分住せしめ漸次相當の開墾成績を擧つゝ有り今や床次地方局長は北海を視察す何れ大規模の計畫は視察後に審議せらるゝに至らむ歟。壯丁の徵募半也。曩に旭川師團を訪し節小池參謀長は曰く『北海道は今尙未開地とも稱すべく當第七師團の如き未だ獨立を表する能はず毎年徵募する壯丁は約五千名なるが其の半數は内地より徵募す本年度兵員の如きも二千七百名は内地二千三百名は北海道とす以上の事實なるに依り平時に於て既に眞の獨立を缺きあり故に戰時に於ても國防上遺憾の點少からず本道は地理上よりしても北に樺太あり且十一州の廣漠なる地なれば師團兵の充實を内地より仰ぐは遺憾なり』云々と二年兵役實施の今日豫後備等の關係も深かるべく旭川師團として此感は



有理のことなるが現下北海の人口は事實多數の壯丁を供するの餘地なからむ國防上の重要事なる要請は矢張り北海移住土著民の多數なるに待つべき也。結局北海の發展は事古しと雖移民招致を新なる事實として極力獎勵せざるべからず移民ありて勞力生じ、勞力生じて開拓行はれ、開拓行はれて土地の價格高り、土地の價格高りて擔保有利となり、擔保有利となりて金融活潑となり、金融活潑となりて工藝品も興起し商取引も旺盛ならむ北海有志が現下生産品不足にして移入超過額一千四百萬圓なるを憂ふと雖も移民の多數を得ば之も杞憂と爲らん。故に反對に在道者の一人をも減ぜしむるは禁物也、聞く北海の風土は寒さに關せず生殖力頗る盛んにて出産率は人口一千に付き約三十七人死亡率は十九人にて差引十八人を増加し移民は概して郷里に在りし時二人の兒を産する間に同道にては三人を産すと、一人の増減は延て及ぼす處大なり拓殖爲政者は心すべき哉、要するに世諺の「千軒あれば共暮し」てふ意味は同道に於て重んずべきこととす、有無相通じ千戸益する處あり況んや肥沃粗大の地に幾千萬戸を

増加するに於てをや。

### (五) 北海の鐵道概観

十五年計劃と相待ちて必要なるは鐵道敷設とす先づ北海道が官私線相混交し更に國有に至り今日に達せし徑路を按ずるに

#### ▲礦業關係

開拓使の始め拓殖の創業は礦物收得に在るを察し明治五年米國より地質鑛業の技師を聘し地質、煤田、鐵道のことを調査せしめ其成績良好なりしも王政維新後僅か六年財用多端にして這般大業を起すに至らず會々十一年に至り起業公債募集の舉あり此内百五十萬圓を炭礦鐵道敷設費として下附せられ爾來敷設の計劃に審査を重ね十三年一月幌内炭山の開坑と共に手宮より鐵道工事に着手す此れ同道鐵道の嚆矢とす。

#### ▲結局民業

同道鐵道は始め開拓使に屬し十五年二月開拓使を廢し三縣を置く



に及び煤田並鐵道の業務は工部省に屬し十六年二月農商務省に轉じ尋て十九年一月三縣を廢し北海道廳を置に到り官設鐵道の經營は復之に屬す降て卅八年鐵道作業局に移り四十年四月官制改正の結果鐵道廳の所管となり四十一年再び官制の釐革に依り鐵道院の所管となる、十九年中北海道廳に於て「幾春別炭礦鐵道」の布設に著手し其後經營の都合により一時中止せしが村田堤なるもの允許を得之が補足工事に從事し二十一年十一月全通二十二年末炭礦鐵道會社成るに及び全線を炭礦と共に該社に拂下げ官設鐵道は一時全く民業に委せり。

### ▲敷設方針決定

同道の開發は交通を便にし移民を誘致するを急務とす於此乎北海道廳は更に樞要の地點に鐵道を敷設し港灣を修築するの調査をなし政府に稟議せり政府は之を二十八年の議會に詢り空知太、旭川間の建設を決し翌廿九年五月第九議會の協賛を経たる北海道鐵道敷設法を發布し第一期、第二期線として敷設すべき線路を選定せり即ち「第一期線」は旭川、十勝太間（百五十四哩）十勝太、釧

路間（四十六哩）釧路、厚岸間（二十七哩）厚岸、標茶間（二十七哩）標茶、網走間（六十三哩）厚岸、根室間（六十五哩）旭川、宗谷間（百八十哩）合計五百六十二哩也又「第二期線」は利別太、相の内間（八十九哩）名寄與部間（五十五哩）興部、湧別間（二十八哩）湧別、網走間（八十四哩）雨龍原野より増毛間（四十哩）函館、小樽間（百四十六哩）此合計四百四十二哩とす、第一期は工費一千八百五十四萬六千圓を三十年度以降十二ヶ年度の繼續工事として施行すべく第十議會の協賛を経て同道鐵道の敷設計劃定る。

### ▲變更と遅延

其後拓地殖民の趨勢上豫定線の變更を要するに至り第二期線中の（一）利別太相の内間を池田、網走間（約百十七哩）とし（二）雨龍原野と増毛間を深川、留萌間とし此を第一期線に繰上げ又第一期線中の（一）釧路、厚岸間（二）厚岸、標茶間（三）標茶、網走間（四）厚岸、根室間は此を第二期線に繰下げ函館、小樽は函樽鐵道會社（後に北鐵）に許可起工せしむ、爾來此豫定にて主管廳は



起工せられしも財政の都合上當初の工程を竣らず宗谷線は名寄以北百七哩は未着手留萌線丈は殆ど竣工網走線は尙全部の終工を見ず。

▲國鐵 翻て政府は國有法に依り炭礦鐵道會社線は三十九年十月北海道鐵道會社線は四十年七月に各買収を了し先の全道官私線六百四十五哩は悉く統一せられ國有となる。

#### ▲兩線近況 尙兩海岸に走る留萌、網走間の概況は

留萌線は四十二年二月工事に着手し留萌迄三十一哩八鎖中途中墜道工事ありて滯りしが九月上旬に略々竣工せしも水害の爲め破損の個所を生じたるなり全部開通迄には尙日數を要せむ、網走線は三十九年に起工し陸別迄即ち四十七哩八鎖は漸く竣工し本年九月二十日を以て營業を開始し更に建設基點を置戸に進め野付牛迄は工程頗る進捗せしも野付牛、網走間三十八哩は作業進捗せず全線開通は何れ明年八月頃ならんか。

鐵道概觀を記せり、次て北海道民の鐵道意見を紹介すべし。

#### (六) 道民の鐵道意見

北海道に於ける開拓の急先鋒は鐵道に存す従つて此れ一大研究の要件なり、彼の港灣の如き同道の發展帝國の進運上一刻も等閑に付すべからざるは勿論也、乍併港灣は多少なりとも港灣と云ふ概括に於ては船舶の碇泊荷物の吞吐態を備ふれば若干の目的は其儘にても達せらる、鐵道に至つては敷設せざれば姿も形もなし、延長を訴ふる所以か、願るに北海は激浪猛風多し港灣と鐵道とは相依り相待たざるべからず特に所轄其他經費も全然系統を異にすれば兩者の施政者に對して共々奮發を望まざるを得ざるは言ふ迄もなし這は兎に角現下の北海道民は(一)同道第一期線が國費多端の爲め工事の遲滞せしを遺憾とし(二)沿線の有志は又も國費の増加ありて遲滞するを繰返さるゝことなきや(三)網走、留萌線の竣工に近づき其開拓上の便宜偉大なるに感じ、此



等綜合の觀念は既定の線路は一日も速ならむことを欲し又開拓上必要の線は一刻も早く政府之を採擇せむことを望むや急なり、蓋し鐵道に非ざれば漠々たる北海の開拓は奏功の域に達し能はざれば也、意見に多少我田引水の觀あるが如きも北海道民が夫れく鐵道敷設の要ありと叫び乃至豫定線路を變更せられんことを希望しあるもの大要左の如し

(一)長萬別と輪西間 函館より小樽に至る線路中の長萬別驛より分岐して室蘭に向ふ海岸を傳ひ室蘭市街端の輪西驛に至るもの也該線は膽振の開発及び長萬別、輪西間の拓殖を主旨とす。

(二)苫小牧と止若驛間 膽振國苫小牧より分岐して日高海岸を經止若驛(十勝中央帶廣より釧路港に至る線中)に至る、該線は日高、十勝を開發するのみならず膽振線と相應じて北海道東南部鐵道幹線の成就を圖るを目的とす以上の二線は函館の『渡島開發期成同盟會』の主唱する處とす。

(三)黒松内と室蘭間 函館より小樽に至る線路中黒松内驛より分岐し噴火灣に沿ふて室蘭に至る、該線は第一項の分と略同一なりと雖工事容易なるを主張するもの蓋し該線と第一項の線とは競争上に於て大なる意味を存するに似たり。

(四)黒松内と壽都間 第三項の黒松内驛より分岐して西海岸の一港たる壽都に至る、該線は函館幹部と同港とを連絡し産業及漁業を盛むにし結局壽都の發展を圖るに歸するが如く從て壽都町にて力を加ふ。

(五)瀧川と下富良野間 旭川より岩見澤に至る線路中瀧川驛より分岐して旭川より帶廣驛に至る線中の下富良野驛に至る、該線は空知川沿岸の開発及鑛業の發展に資す。

(六)金山と早來間 岩見澤驛より室蘭に至る線中早來驛乃至苫小牧驛より分岐して旭川より帶廣に至る線中の金山驛に至るもの延長約六十餘哩、該線は厚真、似灣、穗別等所在の豊富なる炭田の採掘、森林伐採及農業牧畜の振興に便し、又釧



路、十勝方面より室蘭に出づる線とす（旭川迂回に比して八十餘哩を短縮す）猶沿線所在の拓殖を計るべきものにして以上諸線中に於ては最も重要な位置にありて而も利益的なるもの。

(七)北見の海岸線と原野線 北見の横斷線と稱すべきもの也海岸線は網走港附近より猿瀾湖（サルマコ）を傳ふて下湧別市街に至らんとするもの原野線は野付牛驛（網走線）より分岐して相の内に出て中央の沃野及森林を經湧別川系を傳ひ下湧別市街に達せむとするもの一方は漁業と開拓一方は森林と開拓とを説く。

(八)紋別と士別間 北見中央の紋別港より旭川、名寄線の士別驛に連絡せむとするもの。

(九)名寄り枝幸間 第八項の名寄乃至適當の個所より北見北部の枝幸港と連絡せむとする者。

(十)士別と羽幌間 第八項の紋別港の意見なり士別驛に對し北海西海岸なる天

鹽の羽幌は之と一線を開かん意見也這は北部の横斷線とも目すべき紋別港と將來の

一小港なる羽幌との連絡するを意味す。

尙北海道俱樂部等にも意見ありとのことなれど之は記せず。

### (七) 北海鐵道速成如何

鐵道敷設の主眼は大約國防、産業、交通の三點に存す北海道としては産業の發展開拓の進歩を主張せんも而も政府は國家的見地と調和せしむるを要す今や同道の鐵道は繰延の爲十二ヶ年に竣工せしむべき第一期線中にも工事遅延の個所あり又各地方の意見は時に極端なるもあり無理に豫定線を變更して迄其意見を貫徹せむとするあり熱心は同情なるも而も理は曲ぐべからず蓋し第一期の宗谷線即ち名寄稚内間の如き北海の幹線は収益少きも速成を要す北に樺太を控ふる今日國防上尤も意を致すを要すれば也、方針決定の要 既掲北海各地の鐵路延長意見は何れも産業發達上有利なるものにして



大約は所説肯綮に當れるが如し乍去北海道は其の過渡的大發展上移民招致即開拓を急務とす然る上は大約移民を招くべき個所は何地の方面を以てすべきか招致方針を決定すべし北海全道廣面積なりと雖も比較的未開にして沃野の地は北見を推さざるべからず長官の見當も茲にあらんかと推測さる、仄に聞く政府も又第二期豫定の北見横斷線を速成せんとの内議ありとか是れ要を得たり其原野、海岸兩線何れが可なるかの如きは既に野村局長等の實地を踏査せしあり今は小異見を立つるの時に非ず國家多事一度機會を失せば事容易に非ず兩沿線關係者は解脫せよ、金山、早來線 更に希望の數線中に急要なるあり這は金山、早來乃至苫小牧線也理由の大要左の如し。

金山早來間には厚眞、似灣、穗別等所在豊富なる炭田を有し森林は模範林を始め鬱蒼たる林相を爲すもの二十餘里に亘り其蓄材實に饒多也特に地味の肥沃なる農耕に最も適す四十二年末調査に農、林産價格二百九萬餘圓を算す未開の今日既に然り其利源推す可し一朝該線敷設の曉は釧勝方面より室蘭に出るの幹線とも稱すべく又旭

川迂回線に比すれば八十一哩餘を短縮す故に鐵道國有以前之が私設を出願せしものありしも政府は官設に意ありて許可せず今日に至る者とす。

膽振の鶉川は大河なり河上の大森林は一寶庫にして鶉川を挿む土壤は實に豊沃にして勇沸煤田見るべし、此所に約六十二哩の鐵路を通ずれば産業の一大發展所期すべし假に一哩七萬圓の建設費を要すとせば四百三十四萬圓の巨額となる、乍併旅客の増加と貨物の豊富とは之を償はん特に同線は民業に希望せしものを官之に意ありとて抑留せし關係あり斯點に顧みても政府は速成すべき徳義的責任あり。

▲輕便鐵道 鐵道院は多事也、而して北海道の鐵道は急を要す野村管理局長の語る處に依れば北海道民の希望を完からしむるには豫定線以外大要五千萬圓を要すと、如何に妙算に老けたる後藤總裁を以てするも斯る要請には應じ難からむ、即ち之が急務として輕便鐵道の敷設を必要とす、輕鐵は法律上に改正を加ふべきあらば之を改正して鐵道院直接之を經營すべし而て北海の本鐵道と交叉し「拓殖鐵道網」を作り大に



北海の産業を開發すべし、然らざれば鐵道院としても見す／＼損失ある本鐵道を容易に延長するは難からん聞く輕鐵とせば三分の一費用にて足ると此外には策なし、道民は同道の風土より輕鐵を云爲するも开は贅澤也停車場の如きは草葺屋根にてよし、乍去大動脈大貨物あるもの即ち日高、根室乃至金山線の如きは本鐵道を要するは勿論也。

▲協力 兎に角北海道は過渡期なり此の過渡期を善用するは創業當時の要意に勝るも劣るなし斯點に鑑み鐵道港灣等の件に於ても各機關は深く心を一に赤誠を披瀝して國家の爲協力奮勵を要すべし、余は深く立ち入りて此間の事を記するに忍びず、當事者自ら顧みて其事如何を點檢せよ、深く感ずる處あり敢て一言を添ふ。

### (八) 室蘭港を速成せよ

膽振東隅の一大港を室蘭とす、見聞せし處を綜合して一大港の修築速成を促す。

▲謬られたる室蘭 北海道港灣中小樽港の修築は期年にして竣るべく函館港は既に兩回の修築を經更に第三回の修築に及ぶべく釧路は工事進捗し留萌亦將に著手せんとす室蘭港は未着手のみか其の方案の確立さへ見ざるは不都合ならずや、蓋し室蘭港は曩に海軍との關係上海軍が當然經營の任に當るべきものとして除外せられ其後海軍との關係は斷絶せられしも更に室蘭港天然の灣形が比較的良好にして隨て之を修築するの必要なしとの謬論が牽勢の爲世人の多くに提唱せられしに因るべく一度六港修築案に除外せられたるも或は此爲なるべし乍去近時室蘭の發達と共に其の非なる事實は確乎立證せらる、於此乎當局幡然悟る處あり三十一年以來中止せし港灣調査を四十年再開し現に續行中とのこと今や十五ヶ年計畫は著々實現せらる須く速に適當の方法を定め改築に著手すべし道廳のみならず一大貿易港に對して中央政府大に之を督勵すべし。

然らば如何に修築すべきか這は技術上の件にて慎重の審査を要する處なるも



▲水深の豊大 若し夫れ志崩、幌茂威間に築堤を築設する者とせば其總水面積は三百八十三萬坪内十二尺以上の水深區域百五十三萬坪を有す而も室蘭港は向ふ十年後の船舶出入噸數豫想千八百九十九萬噸此使用面積二百卅七萬四千九百坪（入港船舶總噸數一噸に付十坪を要すとし一時に碇繋する船舶噸數一ヶ年合噸數の四十分の一として算出）を要するを以て八十四萬四千九百坪の不足を見ん、概算百萬坪の平面積を浚渫して之にあてざるべからず。

此處に同港が如何に内外貿易上に重要な位置を占むるかを見るに屢々説く如く兩洋の聯絡、中繼貿易港、内國貿易港としての數利あり、然らば該港を修築せば如何に利益あるべきか。

(一)多量の輸出入 同港は此れを改修すれば別項統計の如き即ち四十一年輸出約八十五萬噸輸入約四十八萬噸なるもの五十年には輸出約三百二十八萬噸輸入約四十二萬噸を遲滞なく吞吐するを得ん。

(二)荷役の利 現在何等港灣設備なく船舶の碇繋貨物の揚卸甚だ困難にして時化の時一ヶ年平均四十二日は荷役し能はず然るに設備出來の上は十ヶ年間に荷役料のみにて實に三百八十一萬七千圓の利益あるべし。

(三)船運賃の輕減 港灣修築により貨物の揚卸迅速にして又時間の確實を期すべきに依り船舶の碇泊時間は短縮し之に依つて船運賃は輕減せらるべく最少に見積り一噸平均八錢とするも向ふ十年間には大凡百八十二萬七千圓の利益を見ん。

故に兩者のみにて總利益は五百六十四萬圓の巨額に至る假に室蘭港に五百萬圓を投じて港灣修築陸上設備の完成を圖るも兩者の利益にて優に十二ヶ年賦にて其元利金を償還し得べき譯なり以上は積極的なるが消極的には年々港内の漂砂堆積に依つて受くる損害即ち浚渫費を省くを得べし、故に曰く室蘭港は尤も速に修築の必要存すと。



〇(九) 港灣の修築状態 上

北海道四圍の沿岸は殆ど漁業地とも目すべく少しく灣形を爲せる地は概ね多少の船舶出入し大小港併せて八十餘を數ふ就中函館、小樽、室蘭、釧路、留萌、江差、根室、網走、稚内、増毛、岩内、壽都、廣尾、大津、厚岸、紋別等は著名なるもの也此中小樽、釧路、函館、留萌港は左の計劃に依り修築を行ひ又近く行はんとするもの今其の概況と北海港灣の如何とを併記せむ、我等は渡北に際し青森港にて比羅夫丸に搭乗の際風浪の爲め本船に移るに鹹き飛沫を嘗めさせられ又婦人や小兒の苦みを見て早くも港灣改築の感を生ぜしが函館に著するや更に人の聲にて修築の響は耳孕を刺しぬ、扱、北海道經營案には港灣の調査と築港の二種類あり調査は廣井博士等も與り漸々に進み居れり、又修築は現在小樽、釧路の兩港も作業中也今小樽、釧路、留萌、函館の概況を見れば

▲小樽港 四十一年度より向ふ八ヶ年の見込にて着手せしが四十二年度以降二回變更し工事期間を五十二年に至る十二ヶ年とせり工費金五百八萬餘圓也工事は防波堤の築設にして第二期工事とす防波堤の延長七千八百尺港内百四十三萬坪の水面を被覆す。

▲釧路港 四十二年度より五十三年度に至る十二ヶ年を以て施行すべき者工費金四百七十五萬餘圓工事は (一)防波堤の築設 (二)防砂堤の築設 (三)港内の浚渫 (四)臨港河川替及び河口導水堤の築設なり。

▲留萌港 四十三年度より五十四年度に至る十二ヶ年を以て施行するものにして工費金三百九十二萬二千五百餘圓工事は (一)防波堤の築設南堤延長二千五百尺北堤二千百尺兩堤にて約四十萬坪内外の水面を被覆す (二)内港の築設 (三)留萌川の付替へ (四)外港の浚渫。

▲函館港 四十三年度より五十年年度に至る八ヶ年を以て施行するもの工費金百六



十六萬圓工事は(一)防波堤の築設延長約三千三百尺港内約九十萬坪を被覆す(二)防砂堤の築設とす。

以上の外に室蘭、網走、稚内、根室の四港は未だ著手の運びに至らざるもの道廳は漸次修築の歩を進めんとす。

▲岩内の奮發 經營案以外に西海岸に岩内港あり今や漁港としての修築は略々竣れるも同地有志者は更に商港として大修築を加ふるの要を叫ぶ、這は尤も必要と感ず尙壽都港も修築の目論見ありと聞く。

(九) 港灣の修築狀態 下

▲網走と氷流 網走港は北見東部海岸の要港にして網走線の臨海點也此處に參考上「北海道命令航路」の概要を記す。

(一)函館網走擇捉線 數千噸の汽船參艘を用ふ函館より南東根室岬角を傳ひ網走に

至るもの (二)函館根室線 六月より九月迄毎月二回發船するもの (三)小樽稚内線 五百噸以上の船を用ひ留萌を経て稚内に至るもの (四)小樽網走線 七百噸以上の汽船二艘を用ひ稚内岬角及び興部等を経て西北海岸より網走に達するもの (五)小樽天鹽線 三百噸以上の汽船二艘を用ゆるもの (六)函館大津線 三百噸以上にて浦河沿岸航路に用ふるもの (七)根室近海線 九十噸位にて根室色内間等を往復するもの (八)百八十噸位にて江差方面に往復するものにて北海の海運を掌る。

該命令航路中大噸數の汽船を使用するは網走線とす以て波濤蒼々たるオコック海の海運を維持す、網走港も平常に於ては烏帽子岩の邊にさへ千噸許の船を寄せ現在左程支障なきも北風吼るに於いては港内安全區域は僅少なり故に網走線の竣工に伴ひ海陸施設の上に同港を修築すべきは勿論也併かし冬季の氷結又は彼のオコック名物の氷流押し寄するありて兩三ヶ月は閉港の姿なりと然らば假りに三ヶ月閉港とせば其間は築港



せし固定資本は毎年四分の一宛遊び居る譯なり之の結氷關係を排除し得ば北部の大要港として五百萬圓は愚か一千萬圓を投ずるも何ぞ惜まん哉前記の如く修築は要用なるも當路者は他港と比較して適當の按排を要せむ又背後の貨物は鐵路に依り釧路港に出すも可ならずや乍去同港の修築調査は速に始むるを要とせむ。

▲**綾別港と沖合漁業** 北見横斷線の敷設も遠きにあらざるべきを以つて綾別港の將來は有望なり背後の物産は饒多なるが特に近者北見の沖合漁業旺盛の趨勢あり故に同港は漁港として修築の要あらむ商港としての希望は羽幌線にても敷設せられし後の談ならむ。

▲**一掃を要す** 小樽乃至釧路港（其他にも多少）區町民有志者間に軋轢存するが如し曰く地主派曰く商人派曰く町長派曰く非町長派曰く何と、此れ一は該地方勃興して利權多く自然軋轢を生ずる次第にて聊か結構の現象なるも乍併諸氏の双肩には種々の大事業を控へあるに非すや特に築港費の如きは巨大に達し之れ一に國民が辛苦せし

一厘一毛宛の層重に依る、如何にして北海の發展に資すべきを念とすれば如斯ことは起らざるべし利慾争も相當程度にせざれば相濟まざるべし經營案成るの日特に三思を要すべし。

### (十) 拓殖資金の充實上

拓殖使は明治四年米人ケブロンを雇ひ麥酒、燐寸等の製造に着意し機械工業の保護に努めしが組織立ちし金融機關の設置は稍々是に遅れ明治六年三井組開拓使用金取扱を爲し支店を同道に設け九年三井銀行出張店と改稱せり、此れ實に同道に於ける銀行業の嚆矢也、十二年國館に第百十三國立銀行を開く同道に銀行本店あるの濫觴とす其後商業銀行起り更に三十二年には政府監理の北海道拓殖銀行設置あり現今に至る、北海施政者は疾に工業、金融に注意せしこと如斯なるも同道も一張一緩あり開拓資金に對して始め大華族の同道に放資せるあり之を憑みしも其後開拓資金の回收は内地の事業



に比し不利なりしに願てか大資本家の斯業に従事せるもの減少し従て開拓資金も不充實と爲れり、同道が供給地なるは無論なるが農業者の戸口を點檢するに四十一年は專業兼業を併せて十三萬九千九百六十五萬六千四百一人にして北海道全人員約百五十萬に對しては半數弱の姿なり、此等拓殖關係者は事業發展の爲資金を需むると急なるが拓殖銀行創立し低利資金の便宜を得たると大なりと雖も而も種々の事情は未だ拓殖資金の充實せりとは斷じ難きに似たり、拓殖銀行が拓殖開始して本年上半期末に貸付せる金額は年賦償還貸付金に於て口數一萬四千八百八十八件千三萬八千七百六十八圓餘定期償還貸付に於て口數三百七十一件、百八十三萬三千九百九十九圓餘產業組合及連帶貸付金にて口數百三十三件、十一萬七千五百九十九圓餘產物擔保貸出金に於て口數は六十一件、卅七萬四千四百六十三圓餘總計金額一千二百三十六萬三千八百五十圓餘に達す即ち此を直間接拓殖資金と目せば即ち農家一戸に約一百圓弱を融通しあるものとす此れ頗る大なる金額也而も銀行以外高利を以て不動産乃至產物等を擔保として農業者等の

使用せる借り金は元より詳細精確を期し難さも四千萬内外なるが如く其の利率も年一割七八分より三割強に及ぶ故に折角開墾せるもの又は開墾しつゝある土地も多くは高利貸の手中に歸せしめ結果は大地主を益々多からしむ傾向となる而して凭る高利を要する理由に至つては農業者が不相當なる贅澤を爲すこと、其他種々の理由相綜合し居れりと斯點の解決は種々あるべく又慎重に調査せざれば言を及ぼし難さも先づ拓殖銀行に於て不動産貸付の業務を擴張し資金を増加するにあらんか、現今同銀行に於ても一般金融界の狀況を利用し努めて有利の資金を招き拓殖債券の借換を行ひ漸次不動産擔保貸付金の利率を引下る方針とすることなれば追々關係者の希望に副ふべしと雖ども元來拓殖銀行は臺灣銀行等と異り銀行券發行等の資格もなし之等に依るも先資本金を増加するの必要存すべく且又現在同道三個の支店各有力地に擴張し土地監査等の敏速、資金貸付の便宜を圖るを要とせんか而して同道としては勿論同銀行に信頼して資金の大部分を仰ぐべく他に分外の顧慮を要せざるは無論ならむか。



## (十) 拓殖資金の充實 下

更に拓殖資金に關して述べべきあり(一)信用組合の要此れ也、試に新十津川村の信用組合を按ずるに其始は二十七年にして三十三年産業組合法の發布と共に信用組合事業を發展せしめ現今資産一萬六千九百九十餘圓運轉資金約一萬九千圓に及ぶ而して貸付金制限及利息は無擔保又は有擔保にして現今の利率は

百圓未満

月一分六厘

百圓以上千圓未満

月二分二厘五毛

千圓以上は

月一分

組合員の利する處大にして其結果は更に水田約百二十八町步菓園約十五町步桑園約二町步を擧ぐるに至れり、如何に拓殖に益するかを知るべし、又組合を利用して低利資金を使用する便もあり、同道としては該機關の設立尤も必要也、其他瀧川村の購買、

販賣組合も好成績也、之に則り道民自個は自働的に發奮すべく其の他共同倉庫等は產品の價格を維持し且つ金融上裨益多きを以つて漸次歩を進むることを要す、打切つて茲に零細の金額を集むべき貯金に一言せば、今同道の金融概況を見んか本年上半期末函館商業會議所の調査に依れば金融緩漫の大勢より金利も最低一錢六厘を唱へ各銀行に於ける月末殘高を見るに前月に比し預金は五十二萬八千圓を増加し貸出高は四萬六千圓を減じ更に前年同期に比すれば前季に於て百卅九萬圓を増加し後季に於て五十萬千圓の減少を來したり、貯金は彼の北海道病と稱する贅澤慣習を匡正し一方資金を増加すべきに依り同道としては一舉兩得也今札幌遞信管理局の調査を見るに四十一年は四百五萬餘圓四十二年は四百八十六萬圓にして前年に比し八十一萬圓の増加也、這れ眞に貯蓄的觀念の發展より來れるや如北海道も金融緩漫なるを以て自然貯金額を増加せし傾向なるが如きも而も長官は數年來頻りに貯金の獎勵に意を用居れば或は該意味の發現多かりしやも測り難し、兎に角該現象は注目を要すべきが益々之を獎勵し華



奢を戒め零細資金を積んで北海發展の資に供するを要とせん、特に近者港灣修築、鐵道延長河川改正等北海道の事業多く其土木事業等の支拂金額は自然道民の懐を潤すべきを以て浪費なきを要す余は貯金が地方の資金を中央に集むべき利害に對しては別に所感あり今は浪費を戒むのみ、蓋し北海道病と稱するものは北海道の宿痾にして彼の戸五町歩の耕作を手堅く行ふに於ては餘資生ずべきに、利のある處に轉々して開耕を完からざらしむるに至る特に地主等に放逸甚だしと聞く、長官は之を評して「少しく都合善くなれば札幌に出て斜子の羽織に仙臺平の連中となる」と、頗る實情を穿てり。

### (十一) 結論

▲**鑛物調査は進捗を要す** 同道の鑛業は石炭を最として硫黃及金、銅等之に次ぐ四十一年の産額は九百三十萬圓餘、農商務省は三萬八千圓を支出し該調査を開始し本年六月より技師を同道に派遣し目下調査中なるが鐵道は既に本年延長の個所あり

り事業家の投資關係もあるべきに據り其調査は可成進捗せしむべき也。

▲**林政は實際を顧みよ** 千島を除き同道の國有林は約四百二十萬町歩存し道

廳は四十一年六月より森林整理に一段の計畫を立て稍効果あり、乍併林政の方針は實際を顧るを要す、彼の伐木乃至運搬に際する検査の如き其詳密は到底充全を期すべからず出來ぬことを出來さしめんとするは徒勞にして而も他方の迷惑も不尠血を以て血を洗ひ不知何等か改むる處ある、詮するに治者と被治者の手數あるのみ次に彼の山火事は警戒を要す、北見の興部方面の如き距離二十里を燒き日數一週間に亘る燒失の巨材實に多數也、這是道民一般に國富の山林を愛せしむの觀念深からしむるを要す、火災の序次に同道の保險事業は可成發達の域に進めたきものとす一般市街の家屋構造は不完全にして水道等の施設も稀なれば也。

▲**冬季と家庭工業の關係** 同道冬季の農家は一ヶ年の薪炭の貯蓄作業を爲し又肥料の運搬等雪中を利用す併し女子等には徒食する者不尠特に市街地に於て此傾向



多しと同道は織布類の内地移入多く足袋丈けにても一ケ年に百五十萬圓を要す、須く家庭工業を盛にし移入を防ぐべし。道廳に於ても染織等の講習所を設け之を奨勵すべき方針なりと、積雪の重圍中婦人の閑居は不善の因たり、家庭工業の振起方法を研究すべし。

▲諸邑發達と小金融機關 四十二年末に於ける銀行數六十、本店を有するもの十四、支店三十二府縣の銀行支店十四にして小樽十三函館八札幌六旭川四岩見澤二室蘭町二其他二十五なるが鐵道に依りて一盛一衰を來す諸邑もあるべきが、各市邑は四五ケ年間に著しき進歩を來すべきは内地市街の多く固定的なるに比すべからず、特に十勝北見の如きは近く一變化せん故に小金融機關の設定を呼ぶもの尠からざるべし。

▲巨額の勞銀を利用せよ 西村土木部長の説に依れば十五ケ年計劃に伴ふ必要の勞働者は十五ケ年を累計して三千七百萬人也假に一人五十錢の勞銀とせば千八百

五十萬圓に達す今回北海有志の移民會社創立等あり土木勞働者は這般機關等に依り漸々同道に集ふべきが斯る巨額の金は長官の意見の如く直間接の循環作用により北海開拓の資に歸せしむるを要せむ、以外鐵道關係の土木的勞銀も忽諸に付すべからず。

▲大地主の功德 北海拓殖の初期に於て毛利、池田、伊達家等の開發に盡せし力や多し而し移民は勿論農產品の價格も此等大地主の力に待ちたる事少しとせず、十五年計劃成るの際先諸家の功德を思ふべき也。

▲北海道の一大弊害 一般經濟界の影響及移民の減少等と共に土地の價格は四十年頃に比し大に低下せる個所少からず中等大地主中には今や金融意の如くならず土地の價格を高めんとし或は拓殖會社の設置運動等を行ひし向もあり之れ設立を見て土地を賣退け一儲けせんとの魂膽とか此等に類する山師的の考を抱懐せるもの稀ならず北海道の發展を毒するもの也長官の憤る處一理あり。



### ▲結論

隔山見煙早知是火。隔牆見角便知是牛と、同道は近き將來に一進運を來すべし、其結果一足飛發展の期は同道多年の潜勢力を發揮すべきか、煙を見て火を知る底の人々は北海の天地を等閑視すべからず、終に吾人は同道に付て經驗淺し偏に北海開發の急に想到して着筆せしもの其至らざるは讀者の高音を祈るのみ。

## 北海道の視察

北海道如何は三十年來未決の問題也如何に北海道に對すべきかは今に於て尙渾沌たり臺灣と樺太を掩有し、滿州を支配し韓國を合せんとする帝國の現狀に於て、面積六千餘方里、本邦の四分の一を占むる北海道が尙斯の如しとせば、此れ豈國民の堪ゆる所ならんや、余今回の機會に依りて北海に渡り今や巴港に在り、之より拓殖の方針、鐵道港灣の施設、貿易の狀態、移民の現狀將來、諸工業の實際を視察研究して徐ろに讀者に報ずる所あらんとす、第二十六議會は北海道十五年計畫を可決し繼續費七千萬圓を認めたり、今後如何に消化され運用さるゝかは極めて重要な問案たり、讀者の爲め何等かの參資たるを得ば幸甚也。(四十三年八月函館にて)



## ▲北海唯一の船渠

八月十二日朝函館船渠會社を觀る、一行樓上に集ふや岡本取締役、近藤主事等同會社の概況を説明す、大要に曰く、

明治廿年頃柴田文右衛門氏等之を創意し廿九年東京に於て創立總會を開き澁澤、大倉氏等の意見あり六千噸の船渠とせり而も尙狭きを以て三十三年一萬噸に擴張せり、先に六千三百五十噸のアイラ號の如き同渠にて修繕せり、其後重役の更迭あり海運不況の爲缺損を生ぜしも昨今次第と回復の途次にあり。

技師長品川久太郎氏の案内にて工場を見る、高松丸（千三百二十噸）五六日前に入渠し修繕中にて十三日出渠なすべく次で石垣氏所有の笠間丸入渠すべき豫定也、工場は鑄物工場、器械工場、製鐵工場、積材所、仕上所、發電所等あり、引上船渠には驅逐艦電號の廢艦あり職工は今將に之を分解して機關の若干を收得せむとして作業中也、

衝突、恐しき廢艦の過去の歴史は實に悲慘の極みを包むものなりき、昨年電號は葛登志燈臺の沖に於て金龍丸と衝突し遂に沈没し後其半部が引き上げられたる也、藻屑枯れて各部に附着し光景物凄し。同社の資本は百八十萬圓にして本年上半期の缺損は五萬五千三百四十一圓餘なるが入渠船漸次加はる趨勢なれば自然良好の成績を見ん。

## ▲五稜廓畔の感慨

公會堂は昨年より工を起し今や大要の建築成る規模大にして眺望尤も可なり費額七萬三千圓其内五萬圓は越後人にして久しく函館に在る豪商相馬哲平氏の寄贈に成るもの函館商業會議所は其一部を借り居れり、同會堂より函館灣を眺めば一眸の裡に收る區會議員諸氏等は盛むに修築に關して所見を述ぶ其意見は追て記載せむ。貯水池は臥牛山麓に在り元來同區の上水道計畫は二十一年に起り二十九年に竣工す工費實に「四十五萬八千圓」を投ぜりと、石燈歩を拾ふ何千回山腹に貯水池を見る之れ赤川の水を鐵



管もて之に上げ更に區内に配水するものなり、公園鉢山は海拔百二十尺此處に在り「水産陳列場」を見る次で圖書館に至れば長谷川淑夫一行を懇接して且書籍等の寄贈に預らば幸甚なりと陳べられたり○八幡前の勝見亭にて午食し雨中健脚を運ばせ碧血の碑を見たり碑の文字は佐瀬得所の書しもの也、二人挽の腕車を飛ばして一行五稜廓に至る途約一里許雨色を帯びし郊外の景一入なり五稜廓に達すれば濠池あり橋あり黒門の傍らに「五稜廓、陸軍所管」と書しあれり、廓内別物なく三十八年守備兵の爲に兵舎を作り新らしき銃架等存ず土壘は今の角面堡にして何れよりの敵にも對抗し得るの組成とす松風颯々として古へを語るかの感あり、昔者榎本氏酔後の吟に

五稜廓畔望江城 流落天涯孤客情

有約明年慶逆賊 滿場春色調千兵

又大鳥氏は

兵氣衰頽事既窮 翻然代衆殺斯身

獨羞一片男兒骨 不曝白砂青草中

と、土壘今尚ほ存じ白砂青草舊との如しと雖世運幾轉回今は之れ拓殖十五年計畫にて北海の天は多忙なり然して又多望也、之日セメント會社を訪ふ豫定なりしも風浪強く中止せり。

### ▲函館の大懇親會

函館の官民有志大懇親會は十二日夕刻同市第一の會席小林樓に於て開催我等記者團を招かる、窓外の降雨は稍冷氣を帯びて樓に迫れど滿堂の主客は和氣霽然として百疊の大廣間に居流れたり、岡本商業會議所會頭取先づ起ちて曰く

風浪を冒して東都各社記者一團の來臨を得しは本道の榮とする處也。曩日北海道拓殖計劃が議會の案に上るや諸君の雄大なる文筆は大に一般の注視を惹き十五ヶ年計劃も通過せり。又函館市は過去の火災に於て大に諸君の配慮を辱ふし今や貴覽の如



く略々建築も埃らんとす茲に感謝の意を表す。而して十五年計劃以外北海の前途は鐵道に向ふて大なる希望を有す并は幹線の延長未だ充分ならず支線も又延長を期す、更に函館築港は北海の咽喉にして貿易上重大の位置を占む故に築港の件に關しても又諸君の高見を聞かんことを切望す。

記者團の年長記者答辭を述べ函館藝妓の大漁躍りありて東男の眼を喜ばしめ主客胸襟を披きて酬献の後も十一時を以て散會せり當夜の重なる出席左の如し。

- 石垣隈太郎 伊藤徳太郎 林 豊三郎 工藤忠平
- 工藤儀三郎 遠藤吉平 吉岡 憲 函館日々新聞
- 北海新聞 大久保利助 渡邊長藏 渡邊 武
- 龜井邦太郎 勝田彌吉 米村伊三郎 谷津彩次郎
- 内山吉太 松下熊槌 藤村駒吉 小熊幸一郎
- 齋藤重藏 木村誠次郎 木島豊治 三阪充吉

- 平出喜三郎 杉野三次郎 伊丹二郎 徳根卯三郎
- 小河原秀雄 函館貯蓄銀行 菅谷合名會社 古川金兵衛
- 函館水電會社 村上雄吉 鹽谷甚右衛門 柳田立治
- 函館船渠會社 セメント會社 出張所 今井會社支店 山川一太郎
- 千島汽船會社 二十銀行支店 伊藤 茂 長谷川淑夫
- 池田勝右衛門 池上三郎 和田惟一 渡邊健藏
- 梅津福次郎 八木橋榮吉 安井重三 藤野支店
- 近藤孫三郎 新 與三郎 廣瀬孝作 杉浦周作
- 田村力三郎 石塚彌太郎 金澤彦作 有澤金太郎
- 明石正三郎 齋藤又左衛門 大下喜久之丞 大石三津男
- 田中貞藏 澁谷金太郎 新 彌七郎 河毛支應長
- 岡本忠藏 北區長代理 四柳龜太郎 大石常松



### ▲岩内の一大漁場

十四日岩内有志は一行をして岩内鯉漁業區域を觀覽せしむ午前八時半船を裝ふて出づ同地の有志左右の風光を指點し説く事極めて詳也、先づ岩内市街の背後に聳ゆる岩内山に近き處三個の小山起伏せる處を岩雄登嶺山とす、這は三井合名會社の經營に屬し幕府時代竹内下野守が時の請負人仁左衛門に命じて開坑せしめたるより起り同道硫黄坑採掘の嚆矢とす、夫より三井家の手に歸し種々設備を行ひ業務を擴張して今日の盛大を見るに至る、而て從來の生産額八千噸にては需用を充すこと能はざるより規模を大にせん爲め四十年七月十萬圓を投じ前田村宇宿内川の水利を引用して元山より宿内間に鐵索架設工事を行ひたる結果從來産出額の二倍約一萬六千噸を算するに至れりと云ふ、使用人夫一日約五百人内外にして資本金は二百萬圓全部拂込濟也事務所は同町

御鋒内町に在り主事大岩寅吉氏専ら業務に當る。専用軌道の元祖は北海道なりとは奇なり、船追々進むや茅沼村に一岡丘を眺む某氏曰く、彼の山は岩内炭礦の存する處、該炭山は開拓使の初期に於て米人ライマン氏を聘し炭量を調査し外國より軌道、運炭車を購入し元と山より海濱迄廿町の間専用軌道を敷設せり爾後所有主の變遷を來し今は愛知縣人河合彌平氏之を經營すと、岩内町築港の資源と仰ぐべきものは三十八箇所の「鍊定置漁場」とす、雷電峠の麓なる一帯之なり、漁村は危巖絶壁樹木鬱茂せる雷電峠の下に三戸五戸と點綴せられ漁業期専用の電話線は之に通ぜらる、雷電の高く聳ゆる倒影は海面に撮り藍色の處鯉魚の群集を見るものなりと、漁村の收穫高年々七八十萬圓とは岩内人が鼻を高くするも尤も也、追分節の起る所以は雷電峠にありと聞く、雷電峠の峻險人の通行容易ならず所謂北海の親不知とす、高島を望むて容易に到るを得ず相思の情は胸を焦して遂に追分の一曲となると左様説かるれば左様ならむかとも推想す兎に角漁場の利と雷電の險とは相伴ふて人の唱ふる處なり、正午船を岩内



港に歸へし一同午食を喫して小樽に志す同船せし有志は左の諸氏なり。

五六

山下良定 大岩寅吉 一柳平太郎 道澤敬藏  
築瀬捨次郎 田原彌三吉 堀江爲治 本間作衛  
都築幹太郎 中野久吉 岡村三治 坂手貞觀  
渡邊家藏 秦若次郎 平井與吉 三上常和  
丸山浪彌 信夫源右衛門 若松潮治 米田辰次郎  
浪越重隆 池田庄次郎 隣谷義一 仁科養

### ▲河島長官の一席談

十八日一行は北海道廳を訪ふ河島長官は大要左の如く語らる曰く「東京記者團諸氏が遠來の勞を多とす、本道拓殖に關しては既往四十ヶ年間に種々變遷あり或は開拓使或は三縣分置となり更に北海道廳を置かる、鐵道、鑛山、稅務、郵便等の如きは各其系

統官衙に屬するも悉く本道行政に連關す而して金融機關の組織に付ては拓殖銀行を始め多少各府縣と趣きを異にす乍去以上は互に連繫して拓殖行政を進むるものとす鐵道は主管外なるは勿論なるも二三の新線は最急施設を要すべきものと思考す、本道拓殖の事は幕府時代國防上より起りしものにて慶應二三年の頃柴田某露國へ攘夷談判に派遣されし當時に生まれり當時幕府は北門の國防に盡したるは勿論とす、明治維新の際鍋島侯本道總裁と爲るに至つて琴似邊に旗下若干を移住せしむ、又島義勇江別川を溯り其上流に一平原を發見し樞要の地たるを建議せり之れ札幌にして該市の創定者と云ふべし、其の後明治三年米人ケブロン氏を雇聘し市街地を劃定し農業制も米國式に則り始め大農式に依りしも資本不足其の他の事情より充分奏功せず遂に小農式に變じ五町十町等の小作農制となれり舊諸藩侯の經營も士族授産的のものにして歐米の大農式は行はれず明治七八年頃奥羽より移されし屯田兵村あり國防と農業とに充り貢獻鮮少ならずとす、拓殖の前途に關しては第二十六回議會に於いて十五ヶ年計劃の通過を見

五七



此處に始めて大根本を立つることを得たり、未開地處分法は其の第一著に於いて賣拂ひの制を探り變じて豫約開墾の制となり再轉し無償付與となり四十一年大小地積の區分を立て小地積は無償付與の制に依り大地積は賣拂の方法とせり、元來殖民地は放縱に流るゝを以て之れが矯正を怠るべからず大地主の情態等は頗る注意を要す、移民の多數ならざるは之れ土地處分法の不完全に依るとの説あるも東北地方數年の不況に基くこと多からん大地主等は移民不足に不平を訴るものあるも若し切要急なることあらば自ら内地に出て之を募集するも不可なからむ、現行法の土地處分法は十年乃至十五年間斷じて之を變更するの必要は本官之を認めず、而して移民保護の必要は之を認むるも其の程度多ければ不健全の因由を誘ふに至る先づ官鐵無賃乗車等は相當ならむ歟又國稅等の納稅比較的多額なりと認むるを以て之は若干減少を要すと思考するも未だ當局との交渉は終らず要するに北海道は健全の進歩發展を主旨とすべき也」云々。

### ▲北海宏原の兩工場

石狩曠野に於ける二個の大煙筒は天に冲する黒烟を漲らし石狩原野の農夫は此煤煙を望んで奮躍し居れり其一札幌麥酒會社の工場にして他の一は帝國製麻也、思ふに北海の天は其原料の豊富にして沾らん哉なりと雖も資本、勞力は未し然も十數年來兩會社の作業ありて農作品は其惠に浴し就中關係農藝は滋々發展す北海道の兩會社に負ふ處僅少なりとせず、十六日一行は車を聯ね「麥酒會社札幌工場」を訪ふ、濃厚なる川島支店長は一行を迎へて工場長をして遺憾なく案内し説明せしむ、該工場の沿革を尋ぬるに明治九年開拓使廳の創設に關り北海拓殖事業の一として麥酒原料の大麥及びホツブを栽培せしむると同時に官立麥酒醸造所を起したり、十九年拂ひ下げと爲り其後變遷あり三十九年より擴張工事を施し四十一年竣工して今日に至る、一年の醸造力三萬石とす、一行は此の如く大工場を觀覽するに充分の時間なきを遺憾とせり莫遮熱心な



る工場長は要を摘みて説明し以て仕込場、麥汁冷却室、醱酵室、貯藏室、濾過室、製品場、製品倉庫、製氷室等を大約見るを得たり、樓上に午餐會は始まり川島支店長は沿革及び將來の計畫等を縷述し一行の耳を傾く、食後一行の甲乙筆を走らして芳名帖に其名を點す。轉じて同社の製麥工場に至る藤田技師の説明あり、東洋第一の稱ある同工場は其北部の一半は三十七年より使用せる床上式にして四箇の發芽床、浸麥室、乾燥室、麥芽精撰室、麥芽貯藏室より成り居れり南部の一半にはトロンメル式製麥器械を据へ付け製麥力總てにて二萬石を算ふ、十六日は原料買入れ約日なるを以て駄馬社前に集ひ大麥二百石の買入れありたりと、價格は一石六圓六十錢より八圓三十錢迄にて品質は七等五級十錢宛の開きなり、同日「帝國製麻北海工場」を訪ふ、同工場は同會社の工場中の首位を占め三ヶ年の製造高を見るに、金額として四十年に七十一萬餘圓、四十一年に六十二萬餘圓、四十二年に五十二萬餘圓なり、當日該工場は限なく一般を開放して記者の觀覽に供し工女の寄宿舎、行餘學校さては湯殿迄も示せ

り、工場作業の著實なるは言ふ迄もなきが更に何等の懸念もなき程要意して工女の起臥に適せしむ斯て同社が前途協力一致の作用に依り堅實なる成績を得べきことを確信せり、午後四時同工場を辭す。

#### ▲石狩河を下る

石狩の原江別の地は一方石狩川他方千歳川あり更に江別停車場に依りて交通の便を得るの一大要區也、「富士製紙會社」此形勝を卜し第五工場を設置す、工場敷地六萬六千餘坪木材使用高一ヶ年十五萬一千尺製造高一ヶ月約新聞紙及包紙類にて百八十萬封度とすモンド瓦斯動力は歐洲最新の發明に屬す、十九日午前一行は各部の機械作業を見る第一ポンプ室、第二ポンプ室、沈澱池、製藥室等を見碎木室に至れば巨材は器械に依りて碎かれ片となり其壯觀一同の眼を驚かす、次で木工室、調木室、蒸解室、スクリーン室、ピーター室、漉場、ボイラー室等を觀覽し終て同工場の庭園に於て午餐



會を開かる、津田工場長一場の挨拶を述べ代表者之に答ふ午後二時同社を辭す。汽船に塔じて石狩川を下る、漾々蕩々たり北海の大河左阿右顧心胸を濶ふす、船中道廳の技師あり地圖を卓上に展して治水の計劃及將來の施設を演ぶること詳細也、見渡せば左右の沿岸は特に堤防なく河水が心機發展の自由に任せある觀あり、雨水加ふれば汎濫の區域は數里に達すと水を石狩に恵むもの其の害を又石狩に及ぼす、今や同道の將來は秩序的の建築に入らんとす、水を治めて其害を防ぐは最も要を得たるものとす、視聽共に豊かとなりし頃船は疾くも石狩河口に達す、町民の老若兩岸に旗を建て一行の爲に萬歳を唱ふ、石狩町は従前は鮭鱒の一大漁獲地たりしが近時漁獲頗る衰へ又往時一獲の面影を傳ふるなし此處に於てか石狩町民は町是として港灣を修築し一方輕便鐵道を敷き以て衰勢を挽回せんとす、今其の意見漸々當路に容れんとしつゝあり同町の前途も又多望に似たり、夜に入り燈籠流を觀次日歸途に就く。

### ▲一部の斷腸史

北海の山河今や旅行の好機に際し見聞に便なるも一行の日程は蛇の如くに長く朝夕來訪の客は蛇の如くに繁し只通信をなすの小閑なきを遺憾とす、此處に短筆を呵してアイヌ部落の見聞を記す一行帶廣驛に行李を下し草露を踏てアイヌ部落を訪ふ。途中案内者は北海の熊物語などせしが其言ふ處に據れば今も尙ほ時に餓へたる熊此の地方に出没することありと、帶廣町より約二里にして「伏子古村」に入るアイヌの居住する所小溪の獨木橋を渡り漸くにして彼等が茅屋に至る。二間四方位の低き茅屋の建物は彼等の主も屋と納屋とを兼ねたるものにて入口の掛け藎をを揚げ次で粗扉を叩き告ぐるに家の模様を一覽せむことを求む。土間の小高き處に藎を敷きあり其處に一母、二女あり母は進むて我等を案内し優しくも怪げなる内地語を加へて休息せむを促す、母なる婦人は口邊に一寸許り黒く入墨し耳には環を纏へり髪は長さ一尺許り後方に散



亂せしむ。語る處は一部の斷腸史なり、曰く良人は四五年前既に死して遺兒二子あるも不幸にして長女亦病むとて顔色蒼白なる長女を指せり、我等は其幼男は頑健ならずやと問ひしに母は否とよ這は女なりと答ふ我等の識別に男女の區別の付き難き程女も中々に男々しき姿をなしあり、懸て家寶を見むことを求めたるに母は杯及び能樂の面入れの如き箱とを示す、全く塵埃に蔽はれたれども金泥の光は器物の古雅なるを示せり是れアイヌが熊皮等にて物々交換に依り之を得以て家寶となすなりと、其他數々の家什あるも女は之れに手を觸る、能はず若し之を侵せば神の罰を蒙るなりとて一見を肯はざりき、予等は二女に若干の金錢を與へて去る。土地にアイヌ専用の學校ありと聞き之れに赴く校標に「公立伏子古小學校」とあり、暑中休暇なりとて生徒の授業は無かりしが教場を見れば簡易ながらも一通の施設は整ひたり校長語つて曰く、アイヌの名稱は一寸奇なり第一（チャウエトク）第二（ニンバ）第三（イリン、クル）などありて即ち第一は雄辯の意味第二は殖産の意味第三は弓矢の達人の意味なり今はア

アイヌ人が其の子に命名するに雄辯の意味即ち「ハイカラ」流とも稱する名を附するもの最も多しと、僻土の次第に開け行く態亦面白からずや。

#### ▲十勝中央の帶廣町

廿一日拂曉旭川有志者は豫てより宿題となり今に解決を見ざる中の島遊廓の實地を視察せんことを乞ひしを以て學校と遊廓地の距離等を一覽し直に車を馳せて、神谷酒造會社の工場に到る、該會社は神谷傳兵衛氏の經營する處也、當日業務執行社員神谷桂助氏等一行を迎へ工場を觀覽せしむ其酒精製造法の概略を聞くに、

▲原料 當所に於て使用するは主に玉蜀黍にして之れに次ぐに馬鈴薯を以てす尙近來に至り馬鈴薯澱粉製造の廢屑（澱粉粕）を以て酒精を製造する事を研究成功し之れをも使用する。

▲副原料 副原料として大麥、小麥、燕麥等を使用す之等は所謂麥芽となるべき



ものにて主原料の澱粉質を糖分に変化せしむる爲めに使用する。

▲原料の煮熟 先づ工場内に運搬せられたる原料は煮熟の目的に従ひ即ちエレベートルにて階上に送られ（馬鈴薯は豫め洗滌器械を以て泥土清洗の後）之れよりベンチニ氏蒸罐中に送入せられ適量の水を加へ密閉したる後高壓蒸氣を通じ徐々に煮沸し約二三時間を経過すれば原料中の澱粉質は全く溶解するを以て下方のバルブを開き誘導管を通じて徐々に糖化器中に噴出せしむ此糖化器中には豫め麦芽の粉碎したるものを投入し置くを以て噴出したる原料の澱粉量は麦芽のチャヌダーゼの爲めに糖分に変化す此間糖化器中に存する冷却装置に由りて噴出せられたる液は常に一定の温度を保たれベンチニ罐の内容物全く排出せらるれば更に低度に冷却し純粹に培養したる酵母を加へたる後唧筒を以て醱酵室の仕込桶に送り以て仕込を完了す。

▲醱酵 前段の醱酵桶に仕込まれたる液（醪）は二三時間の後醱酵を始め二十四

時間後に至り最も旺盛にして七十時間内外に至り全く醱酵し盡す此の熟成したる醪はポンプを以て階上の大桶に送られ之より蒸餾作用に附せらる。

▲蒸餾 當所の蒸餾器は獨乙ザクセンベルヒ會社製のイルゲス氏式自働蒸餾器にして最も新式なり大蒸餾器に由つて得たるものは全く不潔物を含有せず其強度は九十四乃至九十五なり。

▲麦芽の製造 麥漬タンクと稱する大槽中に投し水を加へ壓搾空氣を以て通じ充分洗淨したる後水を加へ二三晝夜浸漬したる後麥芽室に移し約二週間乃至三週間の後麥芽製成を了り使用するに至る。

▲工程時間 原料使用時より酒精製成に至る迄の時間は約八十時間なり。

各室を順覽し酒精殘滴を利用して牛、豚を飼養せる牧場をも一覽す、夫れより離宮地なる神樂山に至る、樅樹の巨木は高丘に鬱茂し頂上の平地に達すれば旭川市街は瞰下に在り旭川有志者は此處に園遊會を催し一行を招く、主客の應答ありて互に萬歳を唱



へ午前十一時の列車に搭じ十勝に向ふ、途中金山村にて富士製紙會社第六工場の觀覽を希望せられしも時間の猶豫なく日程を殺ぎしは甚だ遺憾なりしが同工場にて之れを遺憾として工場長始め職員一同停車場に出迎ひ特に伐木所の職工三名慰勞文と北海名物の二丈許もある大蒜を贈られしは一同其の誠の厚きに多大の謝意を表したり、午後六時帯廣町に著し河西旅館に投宿し次で同地小學校の歡迎會に臨む、同地は十勝、幸内兩川の相合する所にあり四顧廣濶の平野にして河流縱横土地肥沃なる上十勝の中央なるを以て將來の一大市場たるは期して待つべし、有力者諏訪鹿三氏同夜予を旅館に訪はる氏は我が社の記者山本氏の知人なりと其の厚意を謝す、夜深ふして皓月團々宏野を照し眞に草より出て、草に入るの歌句を解す。

#### ▲沿道を觀て釧路へ

廿二日帯廣の驛冷悽の氣室に迫り外套を朋るも尙且寒し、正午列車に搭じて釧路に馳

す。石狩乃至十勝宏野の壯には如かずと雖沃草列車に迫りて薰風を送る止若驛には「新田製革所」あり、愛媛縣出身にして製革事業に有名なる新田長次郎氏の經營に係る、工場長新田伸太郎氏より一行に土地の物産種々を贈らる、池田驛に池田侯爵の企業に係る池田農場あり、實に二百七十萬坪を有す、福井、鳥取二縣より小作人百三十餘戸を募り厚く保護を加へ墾成せしもの今迄に十一萬餘圓を費し大なる成功を見たりと、午後五時東海岸の海濤を眺め釧路停車場に入る、釧路町は釧路川口漾々の邊にあり同國西部の貨物集散地たり、鐵道開通後十勝國の貨物を加へて繁榮を増し人口一萬七千九百餘に達す、釧路支廳此處に行政を司り市街の附近に春鳥炭山、別保炭山及び製紙場、木挽所等あり就中木材事業は最も活躍せりと市街は道路高低凹凸の甚しき蓋し日本一の惡道路たる小樽に匹敵す、阪上眺め可なる虎屋に投宿す、同夜町有志者の催にて喜望亭に一行を招待す調理の凝りたる今迄に其比を見ず、秋本町長の挨拶あり、列席の中野安田鑛業所支配人は十日東京を出發し途中所々にて水害に遭ひし情況



を語り且工業界の前途に對しては當分確實に現況を維持し將來の發展を期すべく當局は宜しく工業生産の振興恢復は那邊に依るべきかを深慮せむことを望む又事業家は確實と永遠とを旨とし彼の羽二重の如き見本品と一致せざるものあり爲に對外貿易の障害をなす須く見本は二三年を経るも顧客に於て不精確の點を發見せざる程度迄に注意せざるべからず云々と。宴を辭して歸れば釧路名物の霧深かりき當夜の列席者如左。

前田支廳長、川田晴雄、白石愛輔、中山運輸事務長、長井保線課長、阪本彌太郎  
根室銀行本間支店長、二十銀行片岡支店長、中野安田鑛業支配人、桂井釧勝工業  
會社々長、遠藤清一、萬澤病院長、佐藤釧路製軸所主任、茂又、磯部、飯塚、原  
田、豊島、渡邊、白井、福富、福井、齊土、佐々木、水口、中戸川、三上、前田  
木下、佐藤國司、白石義郎、秋本町長、花輪、奥田、三好の諸氏等。

#### ▲釧路築港を見る

廿三日藤澤氏を訪ふ歸り旅舎虎屋を出て釧路の築港に至る濠雨篠を束ぬる如く舟を獻ふことを得ず、陸上より之を望む、釧路築港事務所に至れば技師關屋忠正氏一行を迎ひ築港經過を説明し次で築港實況を視察す、抑々東海岸の一大要港たる釧路港の修築事業は明治四十二年度より五十三年度に至る十二ヶ年の繼續を以て完成せらるべく四十二年度二十三萬九千七百七十五圓四十三年度二十六萬六千六百九十七圓以上各年増減ありて五十三年度五十九萬七千四百四圓となる豫定計畫なり。今迄の經過は四十二年工、四月築港事務所を設け作業根據地を作り築港用の船入場は疾に竣工し防波堤も本年六百尺を進むるを得べし（詳細別項）今やトラペリンウリエン機其他の作業器械の大準備を爲し居れり。釧路港は北海東部の唯一の要港にして位置は釧路、十勝二國の海岸線延長約八十里の略々中央に在り、北方北見國に達する道路は概して平坦にして釧路、十勝二國及び北見國の一部に對する海陸運輸交通の接續地點として最も形勝の地點たり、其關係區域に屬する總面積は約一千百方に亘り生産價額總計は現在に



於て已に五百八十五萬一千七百九十八圓を算せられ入港商船噸數四十年に四十七萬二百二十五噸なり我々は財政の許す範圍に於て同港十二ヶ年計畫の年限短縮を希望せざるを得ず。同日當地新聞社の催ほしに關するアイヌの熊祭を見て池田驛に引返し一泊し廿四日午前朝池田農場を視察し次で「網走線」の建築車輛に搭じ陸別に向ひ同地に着し一行は此處にて北見行と留萌行とに分る。

### ▲網走線の現在と將來

釧路線池田驛より分岐して北見海岸網走港に走る、廿三日池田驛に止宿するや野村北海道鐵道管理局長此處に來り一行と共に網走線其他の視察を兼ね網走方面に赴くととなる、廿四日池田驛より臨時建築列車に乘車す、車中「薄縁」を敷き車上天幕を張り却つて普通車に勝る、沿線各所の停車場既に成り列車の動搖左程ならず六時間許にして陸別に達す、陸別は昨年迄人家十戸許りなりしが今や戸數六十戸に達し網走線建築

基點地として頗る活氣を帶ぶ池田驛より該停車場迄は九月十日頃開通すべき豫定なり廿五日更に臨建車に乗じて置戸村に馳す左右の諸山タモ等の樹木鬱茂密立其の際涯を知らず真に北海富源の偉大なるに驚歎せり、朝來より少雨降りしかば溪谷の寒冷膚を侵し互に相擁するも尙寒し午前十時置戸村に達す此の間約二十哩。陸別驛迄開通の際は建築基點を此處に進むる都合なりと置戸に著するや寒堪ゆべからず一行は野火を燒き手を廣げて暖る相願みて奇異の感あり、置戸も昨年迄は戸數二三戸なりしが今や四五十戸に達せり置戸村より野付牛村迄は釧路の土工は略ほ成れるが海岸網走に達するには尙一ヶ年を要すべしと、置戸村より馬車或は馬に乗り進みしが釧路、十勝の國境近き處とて道路峻嶮荷物馬車の上下動搖甚だしく吐嘔するあり又は頭痛を訴ふるあり、馬に乗りしものは駄馬中の駄馬を選び進みしが野村管理局長駿馬を御して長鞭を振ひ駄馬連の中に挟み北海道俱樂部有志後殿を爲せし爲め馳走頗る速かにして駄馬連大に閉口せり兎も角落馬者なく午後五時野付牛村に入る、野付牛附近は前の屯田兵村



たりしが地味豊沃にして家屋の建築も大に見るべく該地方將來の發展は矚目に値す  
 (廿九日午前八時、日韓併合成るの入電あり依て常呂港にて祝賀の杯を擧ぐ)

### ▲物資豊富の土地

九月一日朝旅装を整へ馬鞍を検して行程を進む、一條の流域は天鹽岳より發しオシラ  
 チブ川等を綜合して渚滑川となり紋別港の北方里餘に注ぐ此河系一帯の平原を渚滑原  
 野と稱し豊穰の土地にして紋別地方人民の士別より鐵路を分岐して北見海岸に出でん  
 ことを希望するものも此の豊野の存するが爲め也、川に橋梁無く人馬を渡船す漸くに  
 して一同渡河を了し沙留の一小漁村に小憩す竿珠もなき國旗を立て一行を歓迎せられ  
 し其誠こそ歡ばしかりき、サロロ以北の道路は粘土にして昨夜の雨の爲め泥濘馬脚を  
 沒せむとする處あり或は滑走して乗馬者の苦心一方ならず遂に二名の落馬者を生ずる  
 に至る怪我なかりしこそ仕合せなれ、其内雨も又加はる漸くにして興部(オコッペ)に

達し菊池屋と稱する小旅人宿に投じ休憩す、此處に「前進派」と「逗留派」とを生じ  
 前進派は日程を確守して尙八里を飛ばし夜に達するも一の橋方面に出でんとし逗留派  
 は危嶮容易に進む能はずとし議論最中豪雨は北見宏野の風を受けて窓を打つ乃ち興部  
 宿泊と決す、興部驛は人家五六十戸小丘を擁して點綴しあり延て後方の村落に及ぶ、  
 驛は昨年五月山火事の延焼する處となり一戸も餘さず灰燼となり梁橋迄燒き拂ひ眞に  
 悲惨の極を演ず、而も該驛は山に煮海に鑄る物資豊裕の土地なるを以つて恢復力旺盛  
 にして今は家屋も北海道としては立派なる構造にて新驛を組成せり人氣頗る弾力性に  
 富み活氣を帯ぶ、其沿革は三十一年越中人多田三次郎氏が大地積の貸付を受け小作人  
 を募集して漸次發展せしもの也と、一日夜同地の有志者は旗亭川村亭に歡迎會を開く  
 豪雨中臨時に此の如き催しを爲す土地の熱心感謝に堪へず、村長吉田保次郎氏の挨拶  
 も感籠りて一行の胸裡に一種の印象を生ぜしむ、宿に歸れば蓄音器を操るものあり或  
 は出て、琵琶の臺灣入となり或は櫻井驛の詩吟となり遂に夕暮の曲等に至つては流石



に一行も東慕しの面地あり、夜間若干時間の餘裕あり人々机を擁して原稿に親む之を稱して文債の償却と言ふ、この文債償却の四文字は一行が癩癩病を起す際時々東道の主人たる俱樂部員に對して突賊せし武器なり、實に晝は十餘里の陸行に疲れ夜は歡迎會あり何の暇か筆を執るを得ん今夜の小暇こそ僥倖なりき、斯る部落は如何なる品を輸入しあるかを知るも必要あるを以て四十二年の移入數量を小樽口、函館口より來るものを區分して掲ぐれば左の如し。

▲移入貨物數量調

品目	小樽より		函館より	
	數量	價格	數量	價格
白米	三、〇〇〇石	五四、〇〇〇圓	二、〇〇〇石	三六、〇〇〇圓
味噌	一〇、〇〇〇貫	四、〇〇〇	八、〇〇〇貫	三、二〇〇
食鹽	一二、〇〇〇斤	七二〇	三、〇〇〇斤	三〇〇

清酒	三〇〇石	一九、五〇〇	一〇〇石	六、五〇〇
醬油	三二石	七五〇	二〇石	五〇〇
花菱	一、〇〇〇個	二、〇〇〇	一〇〇個	四〇〇
雜貨	一、五〇〇個	一五、〇〇〇	一、〇二〇個	一〇、二〇〇

▲旭川の商取引

天災多き本年二百十日の北海道如何と懸念せしが別に何等不穩の天候を示さざりき、四日王子製紙會社苦小牧工場より河邊稔氏一行を出迎はる、北見紋別港の人々が特に一線を延かんと劃しある分岐點士別驛を過り長亭短驛相去り相顧みて永山村驛に達す石狩川の上流に沿ひ東面の丘陵を背ふて秩序ある板屋の農家は參々伍々稻田に抱かれて存在す之れ永山の屯田兵村也、永山將軍のことども語り合ふて旭川驛に近けば所謂上川の宏原沃野一望に入る、勞力の効果を結晶せし稻は微風に動るきて香を車窓に送







りし時は河水清澄なりしが昨今の雨にて今は濁水滔々一段の奇觀を添ゆ、聞く此邊り水電の計畫に適すと水力利用を北海道が切望するも敢て遠き將來には非ざるべきを以て此地又濟世の益を興ふるととなるべし▲新十津川、瀧川兩村は農村中特に成績顯著なるもの停車場に土地有志者の歡迎あり村積の概況を示さる新十津川村は明治二十二年大和國吉野郡十津川村民六百戸人員二千六百九十一人の團體移住し開村に屬するもの現在人員一萬一千八百七十三人を有す其信用組合は著名なるものなるが抑も之が設立の動機等は

#### ▲品川子爵の遺徳

明治二十七年日清戰役に當り 陛下廣島に御駐輦中同村池本梅吉氏天機を廣島に奉伺し歸途東京に於て品川子爵に面するや子爵は信用組合の設立の急務たるを説き池本大に感動歸郷の後熱心に同志者を勧誘し貯蓄信用組合を設け専ら貯蓄機關に備へ

たり、爾來種々の經過を見三十五年産業組合法に依る無限責任新十津川信用組合の設立を見るに至る、出資及積立金一萬三百八十餘圓を有し其の運轉資金は同村の産業に資すること多大なり。

其他工業の如きも帝國製麻會社の製線工場あり製材場あり精米場あり澱粉製造所酒造會社、陶磁器會社あり以て如何に同村長足の進歩を爲し居れるかを察すべし、瀧川村には鐵道開通の希望意見あるも开は別に記せむ、石見澤驛にて轉乘し夕張に向ふ追分驛にて下車し追分川邊なる追分俱樂部にて茶菓を饗せられたり、夕張炭山工場長岩瀬徳藏氏同地に一行を出迎はる、一行は午後九時炭鑛所在驛登川に着し同地有志者の案内にて炭鑛合宿所に投ず、合宿所は高臺に在り建築優美にして大なるホテルなり眺望宜しく久し振にて電燈下に原稿を草す會心甚だし時に五・日・午・前・一・時。



### ▲新築の王子製紙工場

今日も明日もと漠々たる牧場の視察又は談話等に飽き果てたる一行は勇振河系の方面に出て視聴に工業發展の状態を反映せしめ愉快に堪へず、五日午後四時膽振の苫小牧に入る製紙に於て帝國最大有力の王子製紙會社苫小牧工場此處に在り前山取締役に導かれて觀覽に赴く内徑十一尺高さ一百六十尺の耐震大煙突は濛々として黒煙を吐き平原にある赤煉瓦の大建築物は先づ我等の眼を射る、抑々該工場は同會社四工場の一にして明治四十一年五月建設工事に着手し本年七月を以て竣工し八月一日より運轉を開始せしもの也建設工費を投ずる約七百萬圓新聞用紙及び紙料の製造並に電力の販賣を以て事業の重なる目的とす工場建物は合計五千七百八十八坪内煉瓦造五千五百三十二坪木造二百五十六坪にして就中三千八百二十五坪は二階建百四十二坪は三階建也是等二階建の部分は何れも鐵骨にして米國ユナイテッドステート、スチールプロダクタ

ト、エキスポート會社製造のものを使用し又床の如きも全部鐵筋混凝土たり冬期暖房の爲めにはスチームヒーターを置き又別にスプリングラーを豫備する等總て堅固の方法を撰み火災の防止其他一定の供給力を維持するに必要な設備は遺憾なく行き届き一ヶ年の製造額新聞紙四千八十萬封度サルファイトバルブ一千八百八十五萬封度を見るべしと、觀覽の概要を記せむに先づ木材引上場よりして變壓所に至れば四萬五千ヴォルトは二萬五千ヴォルトに變壓せられ二階に達すれば各機械に配電すべき装置あり赤色は配電使用青色は非番を示す進んで調木室、木釜室、壺木室、抄取室、調成室等に入れば巨大の丸太は直徑五尺許りの大丸鋸のキリ／＼と響せる音と共に任意に截斷せらるゝこと豆腐を切るよりも速かなるに見惚れ或は木釜室に至つては數丈の高さある蒸解器の巨大なるに眼を驚かし製藥室にては硫黃、石炭の品質佳良なるを贊し壺木室にては長短任意の木片末が器械の作用に依りて敏速に分配且つ送輸せるを見洗滌槽等には既に巨大の木材が各作業を終へ醪酒の如くドロ／＼となりて流動するを見スクリ



ン室にては蒸解され洗滌せられたるものを漉取り半成品となり一行或は原料の水と共に流動して紙を形作る巧妙に感じ又は乾燥器を幾度か経て紙質白澤を生ずるを見最終の室に至つて輪轉用一卷の幾多となく出来上りあるを見て快哉を叫べり其詳細は一筆容易に盡し難きも要するに諸機械は最新式にして最も經濟的に組成且つ使用せられつゝあり去つて貨物積卸場に至れば鐵道院線は此處に臨み貨車は自由に出入し得、其他は時間切迫し遺憾ながら之を省きて同會社晚餐會に赴けり。

#### ▲支笏湖水の大利用

一行は天然美を保つ支笏湖と其の湖水を利用せる王子製紙會社の水力發電所とを觀るべく同會社の専用列車を驅つて進む、軌道は同社が會て水電工事を爲せし際に敷設せしもの、小形なる三個の列車を連繫しあり之に分乗す、東西を眺むれば針葉潤葉樹は既に斧片を加へられしあり或は尙鬱然たるあり、十五哩を馳せ蘭越に達す、平坦地は

蘭越に至つて窮る、眸を放てば千尺の斷崖千歳の流に峙ち河川の遙には一帶の高丘大樹林を爲して雲を遮りて天然の壯容を極む。斷崖上の(導水管前池)に至れば水路を傳ふて流れ進する水は滾々として此處に來る、抑も該水電は苦小牧を距ること北方約十五哩に在る支笏湖の流水を利用せしものにして其の水は今し十一萬二千三百二十六方呎の容量を有する導水管前池に至りつゝあるもの、滾々たる水量は延長九百九十二呎平均口徑四呎を有する四條の綱鐵水管に依り發電所に導かる、大斷崖に四個の大パイプ急轉直下し壯觀を極む、崖下の千歳川畔に平地ありて發電所巍然茲に聳へ水管を受けて一萬五千馬力の電力を發生す、水車は端西國エツシヤウキツス會社製インバルスホキール、發電機は米國ゼテラル、エレクトリック會社製高壓三相交流式なり、該電力は三相三線式架空線に依り四萬五千ヴォルトの電壓を以て一部は既に苦小牧工場に送り又一部は之れを小樽に送りて電燈用に供すべき豫定にて送樽線路は目下調査中なり、一行は前池及び崖下の發電所を一覽し工場の壯大なるに感じ又秋霜滿山に傲る



の節紅葉の美麗如何許なるやを想ひつゝ更らに列車に搭じ千歳河畔を進み「鳥柵舞」に至て停る、千歳川は海拔九百七十七呎を有する支笏湖の水流にして實に石狩川の一大支流を成すもの也、而して發電所に送る水力の堰堤は此處鳥柵舞に構成せらる、該處は支笏湖口より四百間の距離を有するものにて湖口と云へば湖口、千歳川と云へば千歳川とも謂ひ得べき程に接近せし流水也、堰堤の延長百四十八尺にして高さ十九尺特に青澄の色を帯べる千歳の河水は此堰堤に閉され十二尺の水深を保ちて深淵となり渠上より之を臨めば身を戦がしむ、堰堤の一侧は水路引入口にして水は此の引入口より三十九鎖の墜道二哩九鎖の水路を経て前池に走るものとす、堰堤の餘水奔激して飛沫となり更に集ふて河岸を嘯み奔逸する態は壯觀譬へむ方なし、特に堰堤の河水に對し老樹之に臨みて影を投ずるの風趣や愛奴が木舟に乗じて支笏湖及び此間を棹すが如き身仙境に在るが如し、聞く關東地方の水電堰堤は工費頗る多額なるが如きも此處の堰堤は其高さも約二十尺なり、如何に地の利を占むるかを察すべし、一覽後又列車を

進めて支笏湖畔に臨み此處に停る。

#### ▲北見沿岸の諸邑

北見國野付牛地方迄の概観は既報の如くなるが尙北見沿岸及び附近諸邑の大要を記すれば左の如し。

美幌地方は農耕及び牧場に適せる土地多く特に美幌川、網走川等に沿へる一帯の地南北十三里東西三里の間は一の大殖民地にて網走線鐵路工事の進捗を豫期し來住者頗る増加せり、田中牧場は北海道の大地主なる田中清輔氏の所有せるもの美幌市街より約二里を隔て地積實に三千四百町歩を占む、數條の小川ありて天然恵の地域たり其内將來耕地となるべき個所多く現在も牧場の間に耕地點在す、一行は一高丘に登りて小憩し漠々たる宏野を眺め紀念の爲め該高丘を東美臺と命名せり、歸途寺田、黒澤、近藤氏及び生と四名にて野草丈餘の中に途を失ひ四騎小徑に彷徨する數刻辛じて一條の



途を得たるに見ても如何に其の區域の宏漠たるやを知るに足らむ、土質の大部は黒色砂質壤土及び褐色輕鬆土の兩者より成り一尺乃至一尺六七寸の表土を有す、現在同牧場には牛馬四百十三頭存す、網走町は北見第一の繁盛地にして所謂網走線の終點と網走港とを控かへ陸海要衝の地を占むるもの戸數一千二百九十三を有す、佐藤町長等の説くところに依れば同港灣の修築は鐵道の臨港と共に最必要にして一方港内にある高さ十五間の帽子岩を目懸け約九百尺一方バイラキ方面より四千八百尺の築堤を爲し北風を防ぎて港内の安全區域を増さんとし其工費は約二百八十萬圓を要すべしと同町の金融機關としては根室銀行支店の一つ在るのみ藤野牧場は市街里餘にあり這は滋賀縣藤野四郎兵衛氏の所有にして廿五年より經營を始め漸次成功に近づき現今畜牛百四十七頭を有す高田支配人は養畜業と投資關係等に付き詳述せり、燐寸軸木會社網走工場は網走川に添ふて位置し同會社の工場中尤も先に開業せしもの一行は同所にて製軸作業を觀覽せり、三眺山は網走附近にあり網走町より網走川を小舟にて溯り昨年焼失せ

し網走監獄の河岸に漸次新建築を爲しあるを眺めつゝ、尙河上に進み網走橋にて上陸急坂を歩いて山巔に達す清澄千頃の網走湖瞰下に在りて風景絶佳、網走より北海岸を進み常呂に一泊し更に雄大なる猿澗湖を傳ひ岡村牧場、日本燐寸會社の床丹工場及湖畔の鬱茂たる大森林を通過して勇別に一泊し行く／＼騎馬を叱して紋別に宿す同地は港灣修築の意見あり商港たるなくば責て漁港にてもと奮發しあり且鐵道延長に關しても夫々の懷抱あり有志は意見を審に披瀝せり更に興部に進み一泊し翌朝オコツク海に別を告げ左折して天鹽に向ひ山間の惡路を辿り下川村に泊す該地方は稻田至て善く稔る九月三日名寄に達し始めて列車の煙を見たり、八月廿四日戸置にて臨建列車と相別れ九月三日名寄に達せし迄十日間騎馬旅行と雖も略北見の局勢を觀たり、要之に面積九百三十餘方里を有する北見州は年々の進歩を來し産業に於て既往五ヶ年の平均増加率は農産三割強工業品一割三厘林産二割強畜産三割五分を示せり爾今鐵道の網走灣乃至紋別方面に臨むの秋其發展や實に多大ならん。



## ▲安全燈にて坑に入る

四日夜登川村なる姥子旅館に宿す室に一幅一額あり幅には岡部司法の筆にて「鳥飛魚躍豁乾坤」と額には後藤遞信の筆にて「開物成務」と書しあり、兩相夕張行好個の紀念也、五日拂曉窓を開けば大磯の高麗山に似たるが如き高丘的森林あり中腹以下は耕作地と爲りあるを見需給の關係北海にも之あるかと興味を感じぬ、數百の社宅其他の家屋は此高丘の麓と夕張川の間に處狹しと接続す、朝冷肌に迫るを以て寒暖計を檢すれば六十五度なり、朝食後一行は旅館にて岩瀬第一夕張鑛長より炭山の經過を聽取す、鑛長は同道石炭分布圖を展きてライマンの實地調査より説き起し北海全體の試掘等尙ほ充分ならざるは畢竟港灣に遠さと地層の關係に依るべしと、同社の採掘は年額大凡五十萬九千六百五噸なる旨を述べられ聽て鑛長は一行を坑及作業場に案内し行く、同會社所有の病院を見其至れるを覺ゆ、歩を進むれば東西兩山溪の間は或は丘陵

に或は小平坦地に悉く之れ作業家屋又は運搬器或は石炭ならざるはなく第一鑛區坪數は實に千百九十六萬九千二百四十八坪を數ふ、先第一新坑附近にて此處より三百尺低き萬字坑に達する高架索道を見る此の間の距離は二萬千尺、容積一噸極度の中へ五分乃至六分を入れたる自動運輸車に此鐵の高索を傳ふて來往頻繁なり車は一時間を以て彼岸に達す、夫れより鐵工場、發電所、木挽工場、空氣壓作所等を觀しが就中石炭巻揚機、空氣機關車（石炭及木材運搬用）扇風機等は一行の注視を集めたり、一行は豫てより坑内の實況を知らんことを希望し觀覽を求む鑛長は第一番坑（平坑）に案内す鑛長の注意に依り燐寸、煙草類は一切事務所に置かしむ暫くして鑛長は各自に一個宛の安全燈を渡し手にせしむ、暗黒の坑内や如何にと人々は不安と好奇心との兩者に驅られながら歩一步を進む、冷風面を嘗めて冷悽の感あり、燈火次第と明晰となり坑内を熟視すれば縱横七尺許にして支持に木材を組み立てあり、然らざる處は堅炭層重して壁を爲す坑内に軌道あり處々に番人存す又電話機通ず扇風至るを以て空氣は特別の



異状なし三百間許にして引き返せり、安全燈は會社に注意を拂ひ考案の末作りしもの殆ど新案と稱すべし、安全無比なる燈心一本三錢なりと聞く、入坑の際は點檢を受けし安全燈を携ふ、安全燈室には數多の女工ありて手入を爲す、歸るさに石炭の露出層を見又撰炭、洗炭所を見しが洗炭所にては器械にて塊炭を水にて洗ひ撰炭所にては數百の女工炭末に至る迄之を漉き返し一々塵砂を拾ひ取り在るを見ては其の成品の火力を強ひるも察するに足りしが以外に於て石炭の一塊も猥りにすべからざるを感得せり而して又相當の價格を拂ふて尙安きものとの感じも生ぜり、世人米の粒々辛苦を解して石炭の一塊一片の辛苦を解せざるは不知の爲めならん、同坑場の斜坑は中に入らずして工場を辭し列車に投ぜり坑場の諸氏及び金田、田代、小宮、山田、藤井、渡邊、福原、花田氏の見送りを茲に謝す。西村醉處曾て「鐵橋架在夕張涯、老樹埋雲炭礦斜莫道山無曆日、何圖見此小繁華」と今夕張千餘戸を存して既に小繁華に非ず更に帝國の工業大に興るの時此の夕張は山を填めて大繁華を見るの期來るならむ。

### ▲壯容なる室蘭

六日王子製紙會社苫小牧工場の河邊課長は今井、細田、岡田氏等と共に支笏湖畔に先着し一行を待つ、同會社は大湖の水を動力とし且や或る向が水質不良よりして往々紙質の如何を問はれしこと等に鑑み諸種の構造に意を加へたりとのことなれば爾今の製紙は一段佳良ならん、工場諸氏と苫小牧驛にて袖を別つ、本線に入り登別驛にて下車夜間登別温泉にガタ馬車を驅る、紅葉谷の邊危険極まりなし温泉に至れば小學生徒燈を提げて一行を歓迎す、雨中の厚意謝するに餘りあり、第一瀧本館に投宿す六日温泉附近及び盆湧池たる地獄溪を一見し七日登別より室蘭町出迎ひの有志者と共に同町へと志す、左に内浦灣を見右に噴火を以て北海を震動せしめし有珠山を眺め「輪西驛」に達す炭礦會社宇野取締役は江藤技師と共に一行を迎へ製鐵所の經營に關して陳ぶる處あり一行は製鐵の原料たる砂鐵團鑛小片又は銑鐵見本等を申受けて乗車し室蘭驛に達



し、母戀の新市街を一覽し夫れより港灣及び埋立地となるべき個所を巡覽し旅館に投ず、同夜同町の有志者及び室蘭に關係ある諸氏は一行を常盤屋に招待して慰勞の宴を張る重なる出席左の如し

松方五郎、宇野鶴太、岩本耕作、近藤宗輔、石口一、石川信、服部支廳長、飯田誠一、岩波町長、山崎龜藏、中村道會議員、齋藤良三、塚原富吉、小林孝一郎、文野文治郎、谷朝雄、栗林五朔、塘貞二郎、中島健次郎、谷俊三、小岸孝徳、白井幸一、田上清人、三宅爲二郎、君島南甫、丹羽鐵道院參事、内山三二郎、渡邊、淺羽の代議士諸氏等

▲更に長官を訪ふ

九日一行は室蘭岩波町長等の案内にて丸一旅館を出て町役場に至り築港意見を聞き栗林五朔氏の庭園を見たり、予は更に炭鑛氣船會社に赴く社前風采凜たる一銅像あり之

高島翁也銅像背面に同會社員の建像所以を刻せる文字あり、石川氏に面晤して去り物産の枕木置場等を觀て一行と共に札幌に赴く、室蘭四十二年の貿易状態は左の如し。

▲貿易

外國輸總		內國				石炭輸出	
輸	輸	道内		道外		道外	總
入	出	輸	輸	輸	輸	輸	總
額	額	額	額	額	額	額	額
五、二七二、三八七圓	一、一五〇、一五八	七、五三三、九八〇	三、六七四、〇七二	三、八五九、九〇八	一、五六九、七八四	四、二五、四六〇	一、一四四、三三四
四、一二二、二二九	六〇一、七三八噸	二〇、〇六〇	五四七、一七四				



外國輸出木材

四三六、一八五石

幾度か來往せし岩見澤驛にて内山氏と別れ厚別川畔白石一帯の水田區劃整然たるを見夜八時札幌山形屋に投じ野村氏の招きにて直に幾代の慰勞會に臨みしが北見方面交通機關の談頗る活氣あり且つ野村氏が蟬丸の謠曲獨吟清興を加ふ、十日午前一行は道廳に河島長官を訪ひ北海歴巡の視察所見を開陳し長官と意見を交換せり終て長官は熱心に國家の大局より北海道行政、財政、現下の移民等に關し時餘談ずる處あり別に際して「地主會設立に關する綱要」を寄せらる正午長官に別る。

▲綱要を一覽するに其の大要は左の如し

農村の興廢、地方の肥瘠、陸産の増減は直接地主の利害に關すること甚大なり之を以て現在及將來を通じ地主をして農業の中心たらしめ農事の指導、獎勵改良等に關しては率先地方の開發に任せしむるを要す之が實行方法として各地方に地主會を組織

し協同農事の革新を計り國家の經營と相俟て之が實績を擧るは良策と信ず、由來本道一般の狀勢は農家の總戸數約十四萬戸中自作戸數は約六萬なるに反し小作戸數は八萬の多數を算す之を以て小作者を保護し健全の發達を要す而して地主會の組織要領は大約左の如く認む。

（一）小作人をして永住安堵せしむべき必要なる保障を與ふること。

（二）前項の目的を達する爲め必要なる事項。

（イ）地主に於て小作人を内地より募集せむとするときは自己所有地の明細圖并農事計畫等の内容及實況等を詳記し且相互契約上の條項を公にすること（ロ）小作人は内地より募集することを努め徒に道内現在の小作人を爭奪せざること（ハ）小作人に對して開墾地の幾分を付與し以て永住土著の觀念を養成すること（ニ）地主にして凡百町歩以上の耕作を爲さしむる者は必ず二戸分（十町歩）以上を自作農地と爲し出來得べき限り經濟的收利の耕作方法を實施し小作人に對す



る模範農場となすこと(ホ)小作人に對して努めて肥料を給與又は貸與し且適當なる小作法を實施せしめ以て地力の減耗を防ぐこと(ヘ)地主に於て出來得る限り牝牛牝馬を小作人に貸與し耕作の便宜を圖り且繁殖せしめ其の生産は之を折半して小作人に與ふるの制を定め尙牛馬排泄物は之を地力培養の資に供せしむること(ト)農場内に共同放牧場を設け自ら使用し若くは小作人に貸與したる牛馬の放牧に供せしむること(チ)共同貯蓄の方法を設け凶年饑饉等不時の災厄に備へしむること(リ)地主が自ら農場を處理せざる時は農事に經驗を有する有爲の管理者を置き自己の利益を確ならしむると同時に努めて小作人を愛撫し其の方向を誤らざらしむるに努むること。

(三)移民取扱事務所に委託し小作人を内地より募集せんとする場合地主相互間協力のこと。

#### ▲札幌にて解團す

十日午後一行は札幌遞信管理局長角源泉氏を訪ひ今回通信上便宜を附與せられしを謝し更に北海道鐵道管理局長野村彌三郎氏を訪ひ同上の謝意を表し且北海道鐵道に關して意見の交換を爲したる後同局長は内地と北海道との比較又は北海道敷設調査に關する件或は長距離輸送賃金に關する件等に付き所見を述べらる、余は曩日札幌の銀行會社有志者が一行を招待せられし時拓銀の赤羽取締役が左の如く述べられしに依り本道拓殖は既往四十年間其事蹟見るべきものありと雖進歩は甚遅々たり、今本道の生産輸出額は四十一年に於て内外共に概ね七千萬圓にして輸入は八千四百萬圓也故に差引一千四百萬圓の輸入超過を來し本道は年々其差額丈け需給相伴はず生産不足となるを證するものとす是れ農業幼稚にして製品工藝の發達せざるに依るべく又豊富なる礦業の尙展開せざる爲にもあらん北海の寶庫を充分に利用せざるは遺憾也其



の原因に至ては施政の適否或は金融機關施設の當否或は金利關係の如き諸種幾多の問題あるは疑ひなきに似たり、諸氏今回視察を機とし講究を重ね本道拓殖の發達に貢獻せられむことを切望す云々。

此の意に基き尙意見を聞かんと欲し拓殖を訪ひしに赤羽氏は不在、馬島取締役に面會し同氏は北海全體の金融關係より拓殖銀行現下の經營と不動産擔保の鑑査情態、今後同行の貸付利率に關する件等に付き懇話せられ予は各地巡覽中金融に關し種々耳朶に觸れしことをも語りて同行を辭し更に札幌停車場に奥田驛長を問ひ關東北の水害と貨物關係の如何を質し歸館せり、一行は北海道俱樂部員及び有志者と同日夕刻より山形屋に會合し「解團」を意味して小宴を張る淺羽、東兩代議士及び俱樂部員の主立つ面々約廿名出席、俱樂部幹事及び一行代表者と應答あり胸襟を披ひて歡交す、一行は宿を出て街燈の下アカシヤ樹を眺めて之にも告別の意を表して停車場に至る、雨中、夜中、微恙の三者を厭はず河島盤谷翁既に在り其他有志者數々集ふ、數回の來往交誼實に

深く諸士と堅く握手して驛を辭す序次札幌區役所、商業會議所は特に數多の資料を一行に寄せらる併せて厚意を特記す、恁て一行は巴港に出て梅ヶ香丸に搭乘し臚なる臥牛山に別を告げ鐵輪急潮を蹴て青森港に著し京に歸る、此行三十有五日本海官民が都鄙となく多大の同情を寄せられ且や最新の統計資材等を寄贈せられしは感謝に堪へず北海發展の爲尙仔細に文字を検すべき也、歸社几を拂へば小樽の添田靜淵翁より來翰あり中に「過羊蹄山下」の一賦存す。

羊嶽秀靈冠十州。

是神孕毓屈安頭。

比公遺蹟如何處。

立馬高原千里秋。

終に一筆すべきは小樽、札幌、旭川方面より通信せし稿四五通は關東北大水害の爲到着せず深く遺憾とす高諒を請ふ。



## 罹災後の青森市

去る五月三日一打の警鐘は青森市安方町の中央に鳴り延て七千五百十九戸即全市の七割一步は焼灰となれり、八月十一日北海観光の途次此地を過ぐるや工藤青森市長は一行を停車場に待ち受け一時間を割愛して却失の青森市を巡視せむことを求む、依て車を聯ね匆忙の間に之れを見る、災後市民は百難を排して精勵事に膺り勇往邁進商工業の恢復を圖るに意を用ゐる心を注ぎ建物取締規則に注意して建物建築に従事し八月二日の調査には本建築家屋千二百十三軒、假建設は九百六十五軒を算せり、而して本年中本建築家屋は二千餘軒假建築は千五百餘軒に上るべし、災後同市の金融又は經濟情態は一時悲運の狀況に陥りたれど幾何ならず稍々活氣を帯び來り現今は相應の取引きもあり、小賣店は商況稍々引立ち物價も左程の變動なし、只建築家屋に要する諸職人の賃金騰貴は致し方なく金融方面は銀行預金増加して貸付金の減少あるの奇觀あり、工

夫は今尙焼け残りの柱礎をこまかしこに鋤にて除き居り或は掛小屋の僅に雨を凌ぐが如き悲痛の狀もあり、改良の一端としては雪除の廂を撤去せしは英斷なるが冬季には多大の不便なかるべきや、乍併火災防備としては尤も可ならん、市公會堂丈け残り茲に青森市役所を置ひて執務し居れり。



## 日本製鋼所を觀る

はしがき

室蘭港の船舶假泊場より短艇に轉乘して風和に波穩なる灣内を棧橋に向ふ、棧橋は東洋第一の聞えある日本製鋼所の専用に屬し附近の海底を浚渫して新に造られたるものなれば如何なる大船巨舶も自由に之へ繫留され得るは勿論、突き出でたる其端には電力を以て運轉する副較轆附の百噸起重機ありて大貨物の運搬に便し外に又十噸運行起重機及び十噸乃至五噸の起重機等設備さる、案内に従つて製鋼所に進めば途中に六十封度又は四十五封度の軌條無數に敷設され専用の狹軌鐵道には汽罐車の運轉するを見受けたり陸に上るや早くも斯の如き光景を視察し海陸運輸上の施設殆ど完備に近きを驚嘆すると共に一會社の力を以てかゝる施設をなすもの我國に稀なることを感じ難て伴はれて事務所に休憩す。

### (一) 會社成立の由來

▲設立の動機 同會社設立の動機を釋ぬるに明治三十九年鐵道國有政策の爲め北海道炭礦汽船會社が其の全線を政府に買收さるゝや回收資金の一部を以て有用有利なる新事業を起さんとの議同社重役間に出て種々考量を重ねたる結果製鐵、製鋼の業を以て最も時勢に適合せる國家的事業と認め之を政府當局に謀れり然るに當局は其有用なることを認むと雖も之を保護すべき何等の方法なくして數ヶ月を経過せり。

▲日英起業家の投合 此時に當り英國の軍艦兵器製造業者として有名なる「アームストロング」及「ピッカリス」の兩社は一大工場を我國に起して東洋に發展せんとする計畫あり、兩社は久しく我國政府に軍艦及兵器を供給し尙各自の發明品に就ても我政府と協議交渉する場合尠からず從て遠隔の地に在りては時間と費用とに於て不便を感ずること多ければさてこそ本邦に一大工場を設け大に東洋に發展せんとする希



望を抱き各自其代表社員を本邦に派して屢々我當局者に賛助を求めたりし政府は時恰も日英同盟の締結されたりし折柄にもあれば若し日英兩者の共同にて製鋼業を我國に起し得たらんには官民共に同盟の實を示すものなりと信じ英國兩會社代表者に向て大に共同企業のことを慫慂したり。

▲創立總會 以上の経過に依り兩者の代表者は喜ひて東京に會合し四十年三月七日始て兩者の間に假契約を結び英國側代表者は之を携へて本國に歸り同年七月三十日英京倫敦に於て本契約を締結し其の十一月一日東京に創立總會を開き茲に日本製鋼所の設立を見るに至りぬ。

▲事業の特長 斯く兩者の意見が比較的容易に合致したる理由は歐米各國の大勢與つて効無んばあらず近時歐米諸國の軍用品需要は著しく増加し政府は直接に之が充實に勉むると同時に民間亦幾多の大工場を經營し相待つて自國軍需品の獨立に努め且つ廣く諸外國の需要にも應じ由て以て國利の増進と國家の擁護とに當らんとす而して

其民間經營にかゝるものは官營事業と異り資金の收支など自ら運用に優るものなり隨て其設備及計畫の遂行上幾多の利便存ずると之を現今各種兵器類の製造が民間經營に依りて發達を遂げたるに徴すれば明なり然るに翻つて我國を見れば兵器的軍需品は只政府經營の各工廠より供給さるゝのみにして民間經營の事業更に存せず故に若し一度各國の趨勢に鑑み來れば切に其急設を要するは識者を待つて後に知り得べきことに非ざる也。

## (二) 經營方針と事業

會社設立の端既に開かれたる後は徐ろに其の前進を劃策せざるべからず、乃ち先づ斯業に尤とも經驗ある山内海軍中將を會社の顧問に聘して其指揮を受くることとなし以て今日の地盤を作るに至れり抑も該工場を室蘭に建設したる理由は(一)本邦の出資者即ち炭鑛汽船の本社所在地なること(二)石炭の原産地に近きこと(三)炭鑛會社



出願地及び海陸軍省用地借用の便ある等にして他に格別の理由なしと云ふ、同社が上記の如き利便を享くるに至りたるは政府の特別なる賛助ありしに由ること疑ひ無し又世人の中には外國人の技術者及び職工を招聘すべしと言ふ者あれど勞銀低廉は工業經濟の重大なる要素にして時に外人の技術者職工を師とする必要あるも日常に於いては必ずしも之を必要とはなすまじ寧ろ勞銀の低き邦人を使用するの利益なること勿論にして邦人の技術が充分依頼するに足るとは外國側出資者も亦之れを認め居れり同社の設備を爲すに先き立ち技術者は親しく英國各工場を巡視しア、ヒ兩社と直接協議を遂げ専門家の助言をも得微細の點に至るまで非常の熱心と注意とを用ひ世界の最とも嶄新なる方法を探るに至れり、言ふ迄もなく室蘭は寒氣凜烈の地にして冬期三ヶ月間は土工其他屋外の工事は殆ど不可能に屬したりしが此の困難に打勝ち今日の如き工程の進捗に見るに至りしもの實に同社の熱心に依らずんば非ず而して建築物の基礎其他比較的土工の手を要すること少き動力工場、機械工場、鍛冶工場等の如きは殆ど完成し

起業に要する各種必要品の製作を爲し傍ら海軍及び鐵道院の注成品製作に従事し資金一日も空費せざる方法を講じつゝあり、同社工場用地並に工場は明治四十年に建設工事を始め四十四年十月頃迄には全部完成の豫定なるが既に其の大作は竣工し第一、二、七工場（完全に作業す）及び發電所は昨年來操業を開始せり而して上記各工場以外更に社有及び借用敷地内に多數の善良なる社宅を建設し業務従事員並に職工等の住居に便せり此等の設備は各國工場に於ても經營上稀に見る處なりと聞く。

### (三) 大工場を觀覽す

北海道に斯る最大工場の設置されたるは實に同道の名譽にして且つ利益と言はざるべからず今各工場を案内されて看得たる概況を次に紹介する所あらんと欲す。

▲第一工場 長さ七百尺幅百七十尺高四十二尺坪數三千四百五十坪餘にして場内を四條に區分し規模頗る宏壯なり場内には最新式製造用諸機械百九十二臺を備へ



且つ梁上移動起重機（八十噸）一臺（五十噸）二臺（十五噸）二臺を設置し各機械及附屬電動機百三十四臺を以て之が運轉をなす。

▲第二工場 長六百五十尺幅百三十尺高四十二尺坪數二千四百五十坪餘にして場内三條に區分し製造用諸機械百十三臺梁上移動起重機（八十噸）一臺（五十噸）一臺（四十噸）二臺を設備し此所を運轉するに百二十臺の電動機を以てす。

▲第三工場（燒嵌部）長四百尺幅七十二尺高實に七十四尺我國に於ける平家建物としては最高の建物なり茲にて坪數八百坪を有し梁上移動起重機（八十噸）一臺（三十五噸）一臺の設備あり。

▲第四工場（鍛鍊部）長四百七十五尺幅百五十尺高四十六尺坪數千九百七十九坪場内を三條に區分し梁上移動起重機「四千噸水壓機」用として百噸のもの二臺「二千噸水壓機」用として三十噸のもの二臺及一般用として六十噸のもの一臺を備へ大鋼塊鍛鍊に適合す約「八分通り」竣工す。

▲第五工場（鑄造部）長八百十二尺幅二百二十四尺高五十二尺坪數五千餘坪場内を五條に區分し梁上移動起重機等（百二十噸）一臺（八十噸）二臺（四十噸）一臺（三十噸）三臺（十五噸）四臺（十噸）一臺及び（五噸）二臺を有す、又五十噸シューメン爐二基二十五噸シューメン爐四基五噸爐二基六噸キューボラ四基を有し百噸以内の鋼塊及び各種鑄造物の製造に適す。

▲第六工場（模型部）煉瓦造り二階建にして最新式の帶鋸、丸鋸及ログフレンム及び各種の旋盤を有し電動力によりて之を運轉し鋸屑は地下に設けたる通風樋風樋によりて屋外へ自動的に排出せしむ鑄造工場に要する一切の模型製作は茲に爲すの設備なり。

▲第七工場（鍛冶部）當工場は長三百尺幅百二十尺高三十五尺坪數一千坪場内を二條に區分し十二噸氣槌並に之に適應する諸設備及び小鍛鍊物製作に對する設備を完備し現今盛に造作に従事す。



## ▲發電及汽罐室

長二百十三尺幅六十六尺坪數九百八十二坪餘ベリスモルカム社の設計製造に係る汽機に依りランカシヤ、タイナモエンドモーター會社の設計製造せる千キロワットの發電機三基を備へ各工場及埠頭起重機の動力に用ゐる別に同様設計になる二百キロワットの一基を設置し各工場並に各社宅其他の燈光に備ふ此等の使用汽機は最近に於ける經濟的設備を具備す而して汽罐室は長百八十七尺幅百十尺あり現時日本に於ける最大なるものにして一萬馬力に適合せるパブコック社專賣の水罐式汽罐二十基を有す又最新式チェンダグレート、ストーカー器を用ゐる人力に依らず器械を以て火夫の代用を爲し燒料及び勢力の經濟を計れり、此外最新式瓦斯發生爐等總て前記諸工場に適應する設備あり。

工場に入れば大鐵槌が把手を持つ一職工の動作にて一上一下せるあり或は十二吋砲身の中心を穿つに毛厘の錯誤もなく器械を操つるものあり或ひは大鋼板が一瞬間に截斷せらるゝあり或は數十噸の梁上起重機の人の操作するよりも迅速に移行せるあり最新

式の汽罐が經濟的に使用せらるゝあり之を要するに(一)巨大なる器械(二)精緻なる器械(三)經濟的なる施設(四)製品に應じて巨大なるは巨大、細密なるは細密なるやう設備の行届ける等悉く驚きの種とならざるはなく殊に職工の動作の機敏なると慎重なるとは一行をして痛く感服せしめぬ燒嵌工場は平屋作りにして高さ七十四尺と稱せられ我國最高の建物なる由左もありなん又た敷地の土質は頗ぶる堅牢にして試みに數十尺掘下せし處を見れば岩石層々相重なり大建築物に適す。

## (四) 三大施設

工場の敷地其他會社の權利に屬する土地は約四十三萬四千坪ありて尙將來會社の權利に屬すべきもの約三十四萬坪あり工場用水は水量豊富水質亦極めて良好なり埠頭工場用地の一角より海中に突出せる堤防は長さ約千三百尺幅六十尺にして其一側を棧橋とし乾潮時には水深廿六尺あり埠頭百噸起重機の下は水深三十尺なりと云ふ鐵道は埠頭



及び御崎の兩點と各工場間とに廣狹軌道敷線を敷設し又燃料運輸に當るものは鐵道院の本線と御崎に於て接觸す。

### (五) 製作品の大要

製作品は若松と異りコンマシーヤル、スチールに屬する類は一切作らず重に兵器、鑄鋼、鋼塊、鍛鋼、黃銅鑄物、鑄鐵等の製作を目的とし我海軍各工廠と略同一品を製し只裝甲板の製作をなさざるのみが異なる點なり大要左の如し。

- (一) 海陸軍用砲身徑十四吋以下各種
- (二) 砲架各種
- (三) 彈丸 (鍛鋼、鑄鋼、鑄鐵) 海陸軍用各種、大砲用彈丸各種、軍艦の砲塔内及彈藥庫内及彈藥庫内裝置各種、其他揚彈機各種
- (四) 鋼鑄物 重量百噸迄の各種形狀及寸法のもの (船尾骨、船首骨、舵骨推進軸承、

砲架、タービン隔壁及蓋框、蒸氣機關臺 其他機關構成材料、發電機枠及電動機枠、鎔類、採鑛冶金用機械構成材料、鑄鋼彈の類)

(五) 鍛鋼物 重量八十噸迄の各種形狀及寸法のもの (各種機械軸類、吸つは其他機關構成材料、タービン用段階輪、軍艦用通報筒、水雷空氣室、砲身及砲架材料の類)

(六) 鑄鐵物 重量百噸迄の各種形狀及寸法のもの (各種汽筒、蒸氣構成材料、水道瓦斯暗渠用諸鐵管、各種コイル類、堅鐵車輪、可鍛鑄鐵品、鑄鐵彈丸の類)

(七) 各種砲銅及黃銅 重量三十噸迄の各種形狀及寸法のもの (船舶諸金具、推進器、各種辨弁類、複水器、各種軸承類、水中發射管、魚形水雷用磷青銅金物類、砲架、信管材料の類)

(八) 高速度バイト用鋼、タガ子用鋼、バイト用鋼、各種錐用鋼、ミリングカッター、螺子錐用鋼其他



- (九) 水雷發射管
- (十) 船舶用諸軸類完成品
- (十一) 各種鑄鋼、鑄鐵及砲鋼、鍛鍊物の仕上製作、各種橋梁、鐵材構成物の製作
- (十二) 各種水壓鍛鍊機、水壓昇降器、水力機類
- (十三) 鐵道用軸類及車輪
- (十四) 鐵板類延伸ロール機
- (十五) 旋盤工及仕上工用諸器具
- (十六) 原器類、精密尺度檢器類
- (十七) 材料試驗器
- (十八) 旋盤、一般機械工場用製作機械一切
- (十九) 機關車及運行起重機
- (二十) 浚渫機及船渠用機械類

## (六) 製鋼所の將來

▲製鋼所重役の談に依れば海軍と製鋼所 從來小艦型時代には多數軍艦の勢揃ひ主義を以て唯一の勢力とせしが既にドレッドノート型の大戦艦主義となりたる今後は最早過去の勢揃ひ主義は如何に富裕なる國家と雖も到底不可能となりたれば今後は只管製造力の充實を計り何時にても大艦を製造し得るの設備機關を有し以て列強に伍するの策に出づる風潮となれり之れ現今列強が相競ふて造船所製鋼所等の増設發展を期しつゝある所以なり我室蘭の製鋼所も亦此趣意に於て國家の爲め是非共成功せしめざるべからず否余は其成功を確信せるもの也。

▲製鋼所の現況 我室蘭製鋼所の設備は既に八分通り完成し餘の二分も明年七八月には完成し工場的全運轉を爲すべし而かも今日既に一部の作業運輸を爲し千七百人の職工を使役し三百萬圓内外の注文仕事をなすつゝあり全部完成後は諸方面の注文



集するに至るべく或る方面より二三十萬圓の注文を得べきは余の斷言して憚らざる處なり如何なる所より如何なる物品の注文あるべきかは今聊か明言を欲せずと雖も民間よりの注文にしても川崎三菱等の造船所が我國に製鋼所あらざる爲め徒らに數百萬圓の材料品を持越し居る現況なれば是等は我製鋼所完成の上は其不經濟を除く爲め必ず我製鋼所に注文し來るは疑ひなき所なり。

▲着々成功を見ん 余は二十八年以來吳製鋼所に在りて此業に従事し先頃迄勤續したるが始めは僅か七十餘人の職工より始め今日は二萬餘人の職工を使役し戦闘艦は既に幾艘も其材料を製造し得たり此吳の實驗上室蘭製鋼の成功は疑ひなく又國家の必要上之は如何にしても成功せしめざるべからず、最も必要なる技術者及び職工は外人を用ひず我邦人の手にて成る、蓋し前年來幾人も外國へ派遣し熟練せしめれば今や十分に其用を足す而かも新式の機械を据付けたれば人手を省くこと頗る多く生産費も大に減じ得らる要するに我室蘭製鋼所のことは多く云ふを欲せざるも其成功の疑ひ

なきことは斷言するに憚らざらん。



## 秋の北海道

### (一) 湖水のさまざま

記する處は初秋に北海道の天然美、人事美、人事醜に出遭ふたことの若干である、北海道は旅行としての價値は十二分だ御隣りの東北の様は列車が河を横断してスゲなく通るものは稀で善く河盤を傳ふて走る此れ丈けても興味が深い、其外に一葦の青森海峽を境として植物の異なるは勿論獸類も時々乙なのが居る儲け口を頭に突き込むて居る人は別だが多少風流氣ある又研究的頭腦のある人には北海道旅行は以てコイである特に晩夏と初秋は善い。

▲鐵線を傳ふて渡船 北海第一の雄大なる湖水は北見の猿瀧湖である、東西六里餘南北二里網走港と紋別港との中間で之が海に近く一方潮と接吻して居る、形状は一寸濱名湖に彷彿だ鑑別村東端が湖口であつて幅三百間もある處を人畜共に船渡す渡

船は鐵索を手繰つて船を進める船頭曰く暴風ますと一時間も掛りますとデなくて十分で渡船した、其の先は高さ海砂が堤で海湖を隔て居る一方オコック海の波濤が白牙を鳴らして岸に迫る一方は無言蒼々の大湖だ御負けに人家が無い馬上「海風吹髮氣豪哉」などと洒落ても時に熊や狼の奇襲はなきかと内々心配ものである、湧別に近づくと邊は對岸の山容迫り何等かヒソ／＼語らんとする様で遂に馬蹄を躊躇はせて風致に我を忘れる這は豪宕の湖水。

▲湖水と東郷大將 函館より桔梗驛に出て園田牧場を眺め二千四百九呎の長陸道を潜りイヨト顔を出せば玲瓏鏡の如き大沼と稱する湖水に御目に懸る、其の狭き處を「セバット」と唱へ茲に鐵橋を架して汽車が通り双方に池水が見へる車窓より漏るゝ聲は「奇麗だ／＼此が東京近所であつたら」の響である、湖中處々に小島がある其の景色はマア小松島の様だ、一小島に大山元帥、東郷大將の銅像が建てある、紅塵の巷に觀るよりか一層兩將軍の風采が發揮されて居る、舟遊びを終へ紅葉亭で御手輕



一杯御肴には名物の鮎這は優美の湖水。

一一三

▲深さ幾千尺ぞ 湖水も十や二十は今迄見たが其の天然美を保てる湖水は室蘭在  
詳しく言へば苫小牧の奥なる支笏湖である日本の湖水を語ろうとするものは支笏湖を  
見なければ未だその資格がない實に造物主の神工には驚かざるを得ぬ、東西三里餘南  
北二里餘苫小牧より約七八里である、湖底溶岩より成り水澄みて苔青く其の中央の深  
さは四五十丈併し道廳でも未測量だが上記は某外人が試めした處である、湖畔に惠  
庭、樽前の二火山屹然として聳へ山顛に薄き煙が見える斯の兩山が湖畔に迫つて投影  
して居る處實に見物だ湖口東に決して瀑布となる直下數十丈下流は千歳川である、彼  
岸の紅葉焼へんとする時其の風致は如何許であろうか、千歳川には王子製紙の發電所  
の堰堤が在る規模宏壯而して千歳川の水色と云ふものが一種特得の藍色を有して美事  
である支笏湖には猿蟹てふ珍しき蟹が住み湖畔には姫鱒孵化場がある、此の湖水の風  
景は北海道第一だ這は幽邃の湖水。

▲三眺山と湖水 北見の網走湖と常呂湖と上記の猿湖を眺むべき三眺山は湖  
水を瞰下すべき眺望地として蓋し北海の一品だ、洞爺湖は曾て志賀矧川が椽大の筆も  
て記せしは世の知る處今は贅せず。

## (二) 元氣に満た農科大學生

農學の叢淵たる東北帝國大學農科大學を訪ひ其規模の大なるを見たが以外に今尙同大  
學には以前の札幌農學校の特殊な異彩が存して居る。

▲楡樹蔭の懷舊 大學の南方に數千頃を有する廣庭がある楡の樹が處々に初秋の  
色を誇つて居る或る日此處に卓を擁し温乎たる佐藤學長端正たる宮部教頭等主客相接  
し新鮮な牛乳と美しき林檎とを手にし我等と解け語り交はした、某教授曰く明治の初  
期に屬する教育界には特殊な學風があつた慶應義塾又は同志社等である札幌農學校も  
頗る之に類し中々意氣を持つて居た之には理由がある、明治九年農學校の設立に際し

一一三



黒田長官より米國のウィリヤム、スミス、クラーク氏を聘して教頭とした、ク氏は米國のアマスト大學を卒業して後ゲッチンゲン大學にビスマルク公等と机が列べ研學せられ南北戦争の時には北軍の一指揮官として劔を秉つて戦つた、其後一農科大學を起して經營せられた人である、氏は着任後實に僅少なる二十三名の學生を相手に渾身の精力を發揮して之を教授せし許りてなく人格の修養に力を用ゐられた其の感化が今に傳つて居る。氏の遺せる有形のものは第二農場の家畜房位であると更に一教授は「當大學の學科を經とすれば緯となるものがある之は文武會である之は明治十年學生間に開議社と云ふものが組織されたのが元である、文武會は現在卒業生及び學生とて千五百十六人の會員を數へ専ら社交的關係及び學生の志氣を振作する機關として居る」と語つて文武會の規則類を示された。

▲嚴寒と戦ふ 在校の健兒は振つたものである野球部は曰く春風胎蕩エルムの梢に嫩葉が開く頃、北海の空は高く澄んで秋の紅葉の美しい頃、雲を掠めて勢球が飛ぶ

ツウーストライクス、スリーポールス、ビッチャー、テークケイヤアと聞けば誰も心躍らずには居られぬ、况て教授連が昔取つた杵柄、若殿輩御座んなれと齋藤別當其儘の奮ひ方、北海の廣野の續く限り球は飛ぶ、庭球部は曰くエルムの木蔭に春は八千草萌ゆる所夏は涼風の來る所秋は紅葉の映ゆる所心ゆく迄技を戦はすエルムの緑とチツトの白は一際美事だ、弓術部は曰く鏑矢の響城門に鳴つた時は弓矢取る身の果報にと唄つたのは昔し話だ、今も生優しくは引けぬもの十餘張の弓は代る／＼引かれ發しと當るの音庭の木梢に響ひて一際心地が好い、スケート部は曰く北海の冬は壯である西刺利亞の雪の海原吹き捲くつた風が雪を飛ばし氷を突ひてゴゴと吠へ立て來る、書に倦み議論に飽ひた時にはスケートは冬の野外の運動の最良なもの、縦横に迂り廻り跳ね廻る攝氏零下三十度が何である、况や月明にして萬籟聲なき時、又日朗にして四邊花咲くが如き雪の朝一人心靜に迂るのも、會心の友打連れて迂るのも各其趣がある、北海の長い冬は書物とスケートに負ふ所が多い……と新しき科學に頭腦



を養ひ而して剛健の氣風と徳操を磨く天晴れ最高學府の健兒に恥ぢぬ行動は末頼母しい者である。

### (三) 愛奴の熊祭り

アイヌを科學的に研究すれば史學、言語學等に益あるは勿論だが此は専門大家の仕事此處には二三有趣味の分を摘み書き、

▲一萬八千の愛奴 昔渡島夷など、稱せしは此愛奴とのこと數々戰亂を試みたことあり今も處々に戰跡が残つて居る、文政年間には二萬六千人も在つたが四十一年末の調査は戸數四千餘人口一萬八千餘日高の國が全道の三分の一を占て居る、又明治八年領土交換の際移住せる樺太アイヌは石狩町附近に八百人も居たが今は減少した。

▲小刀で口邊を切る 家屋を建てるには土地の善惡に注意し昔時は主人死去せる時は其の家を焼き拂つて建て換たが今は愛奴殿も夫は蠻的だと云つて遣らないソ

だ、衣服は「オヒョウ樹」の皮を割き此を温泉に浸し晒したるものを以て織る之を「アッシ」と唱へて著用する併し今は漸々綿服を著す陣羽織は彼等の大禮服である、食物は肉食にして植物性のは副食物位だが追々米を用ゐるもありと酒は中々に召し上る、熊とトツ組む御亭主を持つのだが女も狼とトツ組む位の元氣がなくてはなるまい兎に角女の體格も立派なものだ、併し物に哀れは婦人の天性裝飾には却々に心を用ゐる刺墨は先づ第一のもの夫は口の周圍をマキリと稱する小刀で傷つけ鍋墨を塗り込む爲に五六日間も殆ど斷食するものも在るそうだ、其の次は眞鍮などの耳環であるクラブ洗粉を使ふのがあるか之は鳥渡聞き漏した。

▲鶴の舞 愛奴の熊祭と云ふのは北海道專賣の珍物である、之は彼等の大祭であつて十月乃至十一月各部落で行ふそうだ自分は熊祭の雛形を釧路港の停車場前て見た或る日土地有志者は熊祭を行ふべく釧路在の愛奴を召集し停車場の廣庭に堅牢の棚を聯ねて其の大祭の雛形を遣らせた、熊祭は釧路町民でもソツンなに見ないとして棚外に人山



を築いた、刻に及ぶや例の大禮服の陣羽織を著した總司令官が號令にて薙を敷かせ太刀、籠等の寶物を一隅に飾らせ男は前列に整座し女は後列に行儀正しく座す聽て總司令官が棒の如きものにて神酒を搔き回し之を戴きて口邊にし再三禮拜を行ふ、熊を司る男は禮拜の終るや檻の太繩を解く現れ出てたり北海の赤熊多數の人を見て一驚を喫せしにや吼り狂ひて怒號す熊の司は細き繩にて暫く之が自由に任せしが何にやら二三言熊に示せば熊は人の幼兒の如く熊の掌人の座に頭を擡て尾を振る實に愛らしい、聽て酒一巡するや男童舞ひ次て女立て舞ひホラ、ホーラ、ホラと唱ひ髪を亂して鶴翼に躍り回る（鶴の舞と稱す）其の態實に形容に困むも歡天喜地の句は此んな時彼の欣ばしさを示すに適するであらう、熊は舞の終るや亦檻に入れたが正式の時は之を屠りて二日間も連飲且連舞するとのこと、熊は女が當歳の分には人乳を與へて飼養すると。

▲蝦茶袴でお通ひ アイヌも段々御代の惠みて開け行き釧路邊で前垂など掛けある二十前後の女などは一寸内地人のやうだ、又土人學校に通ふ女の子には草露を分

け蝦茶袴でお通ひの分もある、大したものだ。

#### (四) 中の島の秋色

歸り去り京に入れば己が家の窓敗れ墻又頽る、疾に筆すべきものゝ等閑に附されたるは止むなき次第、角立て給ふな、急潮に棹して南西は函館臥牛山麓の依稀たる容姿より北東は紋別港畔浪靜なる磯に鹽くむ風情も見き、北海の女性を概評せば家庭の夫も糸川竹の夫も圓く大きな軀を除きては左程に立勝れりと思ふ節なし、雪國ゆゑに越路と等しかるべしなどは未だ見ぬ人の空頼みなり、函館は頗る落付き小樽は今や黒船の煙り港を掩ふの繁昌故に萬事手荒し、藝妓連も中に飛び離れし優きもの存すと雖も多くは土方風、漁師風、船乗風にて殺風景の得點には劣けは取るまじ、彼の「大漁躍」は白鉢巻にアツシ著て權操るもの脛の丸く肥えたる見ゆなどは慥に大漁躍の資格を有す斯は満點なるも杯盤の幹旋等は六七十點も如何か、北海には藝妓連の新愛奴躍



もあり札幌は流石に北海首邑の體面を示す豊平の流れは澄みて清く薄野の花は脾に咲き香ふ、此區人品總じて賤しからず大陸的の氣風ほの見ゆ兎に角惡ずれの甚だしからざるは結構也、停車場より十七八町にして中島公園在り綠樹の間小池存し風致極めて美とす秋や一團の月中天に輝く際池畔西の宮の一角より之を眺むれば飽かぬ興に盡さぬ恨もあらむ、若夫れ酒杯の軒を尋ねんか永樂、いく代其他多し札幌の拍子連は大凡東京風にして先は相當なり此處に一對の拍子あり甲を追分藝者と云ひ乙を謠曲藝者と云ふ勿論名稱は他動的なり、中にも小市、玉など最も名ある者なりとぞ、さて如何に北見は氷山押寄する地とは云へ各地の或る女性連の不器量千萬なるには一驚處か三驚四驚せざるを得ず其のスタイル其の衣裳其の言語お話にならず相場は東地の下女位の處なり、そは兎に角或る夕北見の湧別にあり「夕暮れ」の一曲を聴く踏鞴の灘聲岸に迫り槍俵の山氣窓を壓し胡地に似たらむ此の地に於て、二三の客は事珍しとや感じけむそも妓は何處地の人ぞやと彼の女は撥を放つて絃中に挿み今様朝顔日記の如きを語り出

しぬ、自ら云ふ「元是れ山王臺下の出なるも親に従ふて此處に來る數年前父逝きて母は存するも家資缺如し今や三絃を以て世渡るたつきとなすに至れるなりと」一座相顧みて語なし、同道は比較的女少きを以つて女權中々に烈しき處なり十勝、根室の邊殊に此の傾向多しと餘りの擴張は眞平御免也。

### (五) 驛 遞 と 馬

秋高く馬肥ゆるの季でなくても北海道での有興味の一は乗馬である、併し慣れる迄は容易ならぬ難物である。

▲御隣りへも馬 流車のある處は別だが北海の奥に踏み込むと交通機關の要具は馬と荷馬車の二つである、道路と云ふても修繕が届かないから雨天等の節は夫れはく／＼中々にイケない夫で一里ある處へも半途ある處へも馬で責めるお豆腐買ひにも馬で行く、だから乗馬は男も女も幼老共に上手だ、内地の人が若し絶対に馬に乗れない



て根室とか北見とかの在へ行かうものなら夫れこそ殆ど立往生である荷馬車に乗れば凸凹の途であるから動搖無類に劇しく少々胃でも悪ければ直に吐ひてしまふ、さて始ての乗馬には尻を損ぜぬ法として別製の厚き鞍蒲團を要する又驛遞馬と稱するものに「はな馬」と云ふのがある、此は他の馬の跡にはド、ドしても附かないで先へ〜と出る、慣れてからは先馬が面白いが最初コンなのに乗ると痛ひ目に合ふ上達の連中は一日に十里の往復位は平氣なものである。

▲官設驛遞所 北見邊て山の中二三里も無人家の處を行きさて二三十戸も在る處に辿り付くと可成の家に「官許何々驛遞所」の札が見へる、何やら夢路の様な感じがするこの驛遞所は明治二十一年に人馬繼立所が出来夫が現今驛遞所となつて居る全道に二百十五ヶ所あるとのこと官費で建物をして遣り驛馬の繼立旅宿郵便の繼立を爲すのである交通機關上中々大切なのである。

▲賑かな名寄 名寄の市街は今では旭川から宗谷に走る鐵道線の終點である、北

見と天鹽の境なる天鹽山の山脈の急坂峻路を馬で苦勞して名寄の町に出て列車の笛を聞いた時は實に愉快であつた陸行で難儀をすると始めて汽車の難有味が知れる、名寄町は天鹽の南部で名寄川と天鹽川との中間にある新市街だが八年程前には最小村落であつたが今は二千戸近くの堂々たる市街と爲つて居る。



## ●書後に筆す

本書は明治四十三年九月東京新聞記者團が北海道を視察せし際予も行に加り其際本社に状況を通知せしもの也。

一行は國民の中嶋、時事の寺田、朝日の黒澤、帝通の吉岡、日日の日笠、東毎の於曾、博文館の淺田氏等約二十名なりき。

北海の開發は北門の鎖鑰としても將又帝國産業の發達よりしても一日も之を等閑に附すべからず蕪雜の文字なるも聊之の意を充すべく開發の一助とも考へ發行す。

大正二年一月中旬

著者識



# 日本植民地要覽

- ▲植民地(滿、鮮、臺、樺)の要點を記せしもの。
- ▲國力國勢の充實は植民の發展に期待す。
- ▲大帝國民は斯般比較統一ある書を一覽すべし。
- ▲挿繪、寫眞あり本書は趣味に富む。
- ▲本郷弓町一丁目四番地昭文堂の發行。
- ▲代價は金壹圓五拾錢、四百四十八頁なり。

大正二年一月廿五日印刷  
大正二年一月廿八日發行

編輯發行者

東京市牛込區通寺町十六番地  
藤井千代雄

發行所

東京市牛込區通寺町十六番地  
文武堂

印刷人

東京市京橋區西紺屋町二十七番地  
勝亦省三

印刷所

東京市京橋區西紺屋町二十七番地  
株式會社秀英舎





終